

41586

教科書文庫

4
810
41-1922
20000 54274

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



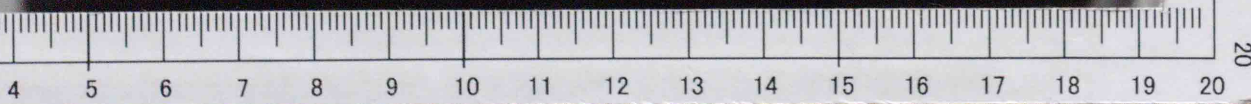
375.9
Ha7
資料室

三訂 帝國讀本

卷



Satoru S. Yanda

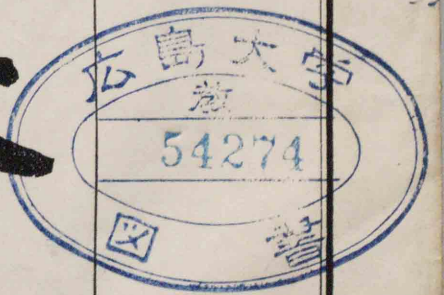


文學博士芳賀矢一編

三訂帝國讀本

東京

合資會社 富山房叢刊



三訂帝國讀本 卷四目次

- 一 明治天皇の御製 其の一……………一
- 二 明治天皇の御製 其の二……………三
- 三 奈良の旅……………八
- 四 月光と古人 其の一……………一六
- 五 月光と古人 其の二……………二〇
- 六 讀書……………三三
- 七 本居翁の遺蹟……………三六
- 八 晚秋初冬……………三七
- 九 桶屋の思案……………四四

目次

一〇	トラヌアルガルの海戦 其の一	四五
一一	トラヌアルガルの海戦 其の二	五一
一二	海軍戦死者ヲ祭ル	五六
一三	死中再生	五九
一四	樂地	六七
一五	板倉重宗	七一
一六	伯林だより	七六
一七	簡易生活	八二
一八	我が家の富	八六
一九	雪	九二
二〇	歳の暮	九六
二一	海上の忘年會	一〇〇

二二	元日	一〇五
二三	逆櫓	一一三
二四	俳句評釋	一二七
二五	冬枯の大井川	一二三
二六	幕末論 其の一	一二九
二七	幕末論 其の二	一三三
二八	中央公園	一三七
二九	北京の四時	一四四
三〇	造化のたくみ	一四八
三一	國語と國文	一五二
三二	言葉の變遷	一五五
三三	岩倉右府 其の一	一六三

三四 岩倉右府其の二……………二六

自修文

一 桃山陵……………一

二 南京の壺……………四

三 文鳥……………七

四 ウイルヘルムテル……………二

五 史傳を讀むべし……………九

六 豊太閤の文事……………二二

卷四目次終

三訂帝國讀本卷四

とほつ御祖

一 明治天皇の御製 其の一

四方の海みなはらからと思ふ世に
 など波風の立ちさわぐらん

かし原のとほつ御祖の宮ばしら
 たてそめしより國は動かず

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

民草

わが民草の上はいかにと

こらはみな軍のにはに出でてはて

翁やひとり山田もるらん

世とともに語りつたへよ國のため

いのちを捨てし人の功は

さし上る朝日のごとくさわやかに

持たまほしきは心なりけり

我が心いたらぬ隈のなくもがな

この世を照す月のごとくに

おもほえず夜をふかしけり國のため

たふれし人のものがたりして

白露のおきふしごとに思ふかな

たみの草葉のさかゆかん代を

おのが身を修むる道は學ばなん

賤がなりはひ暇なくとも

二 明治天皇の御製 其の二

明治天皇の御製が十萬首もお有りなさるといふ

くつろぐ

も近づけ給はず、酷暑嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出なく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが即ち和歌であつたからである。之を思へば、實に恐多いこととて、且又其の神々しい御性格を窺ひ奉ることが出来る。御製を拜誦し奉る者は、一言一句、これが即ち萬機親裁の餘、御くつろぎ遊ばされた御日常の御慰安であつたといふことを拜察しなければならぬ。

風調
上御一人

日常の御慰安の爲にお詠み遊ばされた數々の御詠、其の風調は高く、規模は大きく、如何にも萬世一系の帝祚を踐ませたまふ上御一人の御作とうかゞは

Roosevelt,
米國第二十六
代の大統領
(西曆一八五
九)一八九一
動機

經典

森嚴雄大

れる。國をおもひ、民をあはれませ給ふ大御心は、常に御製の上にあらはれて居る。一首の歌が、米國大統領(一)ルーズヴェルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれた力を示したもので、和歌始つて以來、未曾有の事である。まして七千萬の國民が日常拜誦して、自然に蒙る偉大な感化に於ては、何等の經典も之に並ぶものは無い。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これ程の貴さが、何時の世、何所の國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大、ながく國史を照して、

典範

玉の御聲
草莽の微臣

後世の國民に聖代を語り、典範を示すのである。併し詔勅にはそれ〴〵の形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有することは、實に我が國民の特殊な幸福である。

三 奈良の旅

佐々木信綱

四日、朝とく車を驅りて、三條通を生駒山に向ひて進み候。今日は昨日とかはりて空拭ふが如く、秋晴の

(一)第四十五代。



(二)佐保村大字法華寺。聖武天皇の天平三年創建。寶字

大和路心地よき限りに候。聖武帝の陵を道の右に拜して、佐保川を渡り候。佐保佐紀の山は右の方に起伏して、春の花、秋の鹿、昔ゆかしき心地致候。道のほとり、小川の堤には釣鐘草、野菊花咲きて、うばらの實こぼれ、秋色今をさかりに候。法華寺に至り、若き尼の案内にて、靜かなる本堂に

奈良朝木彫の逸品たる本尊十一面觀音像を拜し候。千餘年の星霜に貴く物さびて、木地の色も淡黒きに、慈悲の御目ざし生けるが如き御姿尊く拜し候。

(一)佐保村大字法華寺。聖武天皇の天平三年創建。

(二)奈良公園内。元明天皇の時高市郡厩坂より現地に移す。

(三)同公園内東大寺の中堂。聖武天皇の創建。

そのかみ

海龍王寺の門を入るに、百舌の聲頻に聞え候。顧れば興福寺の塔、大佛殿の屋根、木の高く聳え、眺言ひしらず候。數町にして道の左なる田野の中に大極殿の遺址これあり候。そのかみの礎石を殘せる芝生に立ちて、青丹よし奈良の都の壯觀を忍べば、懷古の感に堪へず候。草の葉隠れに黄なる花、白き花咲きて、蟋蟀の音も哀れに聞え候。

(四)伏見村。眞言律宗の總本山。天平神護元年稱徳天皇の創建。

次に訪ひしは西大寺に候。四天王像の拜觀を乞ひ

(一)元正天皇の養老年中創建。孤影悄然

(二)第十一代。

(三)都跡村。聖武天皇天平寶字三年創建。

(四)都跡村大字西之京。天武天皇の創建。

て臺所に入れば、箕に盛りたる柚の實の黄なるにも、秋の色深く相見え候。名も懷かしき伏見の里に菅原神社に詣て、畑中の古堂喜光寺の孤影悄然たるを見れば、一入のあはれさを覺え候。垂仁帝の陵を右に拜して過ぐるに、池中に鳥なせる田道間守の奥つきのあたり、鴨數多遊べるが眼にとまり候。唐招提寺は囊の上の鴟尾に日影耀きて、松の雫の落つる音も寂しく聞き候。栗皮色の袈裟着たる僧に案内せられて、金堂、講堂を見候。藥師寺にては、氣高き本尊の藥師如來並びに雄麗なる三重塔に、一入の莊嚴を味はひ申候。又佛足石の歌碑は、奈良時代の和歌の、物に彫られて

(一)生駒村法隆寺
村。聖德太子
の創建。

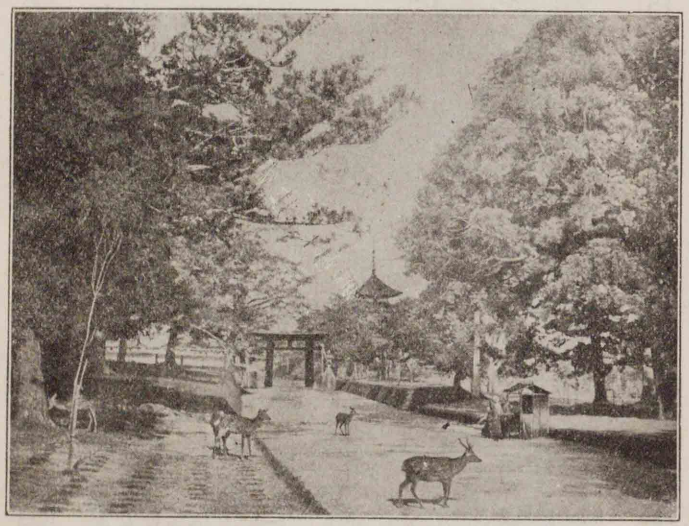
步廊

現存せる唯一のものなれば、殊に目にとまり候。郡山より汽車に乗りて法隆寺に到り候。金堂、講堂をはじめ、綱封藏、五層塔など見めぐり候。今更にいふまでも無き貴重なる古美術の中にも、寂たる步廊の石だたみを踏んで千餘年前の壁畫に對したる時の感、殊に忘れ難く候。

(二)北葛城郡河合
村大字川合。
崇神天皇の時
の創建と傳
ふ。
みそなはず
天がけり

法隆寺を辭して機織れる家多き村を過ぎ、から棹の音を聞きつゝ、とみのを川を渡り、更に又大和川を渡り、廣瀬神社に詣て候。大演習行幸の前とて、頻に道を直し居り候にも、此の大和國原に武をみそなはず今年（一）の秋を、皇祖の靈も天がけり喜ばせ給ふらんと

(一)奈良市中院
町。
(二)同内市芝新屋
町。
(三)同内市十輪院
町。
とある



ある家の崩れたる築地に蔦纏へる門内、ぬるでの梢

夜月明、杉の木立をわけて此處彼處と歩めば、我が身坐るに昔の人にたりぬる心地致し、感興いはん方無く候ひき。

明くれば五日、また雨にて候。極樂院、元興寺（一）、十輪院等を見めぐり候。高畠のあたり雨烈しく、と

(一)同市内高島井之上町。天平十九年創建。

(二)添上郡東市村字白毫寺。元正天皇の創建といふ。けふる(三)公園内。官幣大社。

(四)東大寺境内。

美術の精髓

の紅葉せる蔭に暫し雨宿り致候。やがて新薬師寺を訪ひ候。茶の衣に木蘭の腰衣着けし老尼、物憂げに案内致しくれ候。十二神將の像は幾度見ても飽かず候。門を出づれば薄野菊雨に亂れ、畑を隔て、彼方に高圓山聳え、其中腹なる白毫寺の塔けぶり居候。鹿の群れ遊ぶ神苑を過ぎ、春日神社に詣でて、巫女が梅が枝を舞ふを見候。いつ見てもものどけくみやびやかなるに、夢見る如き心地致候。雨霽れて冬枯の色寂しき若草山のもとを経て三月堂に至り、此處に天平美術の精髓ともいふべき諸佛像を見候。秘佛と崇められたる執金剛の雄健壯麗

なるは、殊にすぐれて覺え候。

大佛殿の鐘樓に例の鐘をつき試み、修繕中の大佛



像 剛 金 執
(藏堂月三寺大東)

殿に詣で、さて博物館を見候。陳列の品品いづれ優秀にして貴重なる

らざるもの無く、げに我が國古美術の粹を萃めたるものと申すべく候。

如實

博物館を出でて、こゝに此の度の大和めぐりを了へ候。樹蔭に憩ひて暫し我が奈良朝の文明を憶ひ、一轉してわが萬葉集に想ひ到り、かくの如き大和の自然を舞臺とし、當時の國民精神を如實に傳へたる我が萬葉集の意義と價值との返すく大なるものあるを感じ候。

—文と筆—

四 月光と古人 其の一

一 菅 公

むかし(一)顯基中納言といふ人は、罪なくて配所の月を見ればやといつた。月夜の玲瓏皇限なき光は、俯仰天地

(一)源顯基。後一條天皇に仕ふ。永承二年(一七〇七)歿。
配所 俯仰天地に愧ぢず

肝膽相照す

眞澄の鏡

一介

(一)延喜三年(一五六三)歿。年五十九。

に愧ぢることの無い心を以て眺めてこそ、肝膽相照す友である。眺められる月に一點の曇も無く、眺める我が心に一塵の汚も無いうるはしさ。良心の眞澄の鏡は、即ち皎然たる月の光に外ならぬ。心靜かに月を見て、靜かに月を樂しむ人は、世に一人の友もなく一介の同情者なくとも、誠に天地の廣い人である。天地に愧ぢない人である。罪が無くて配所の月を見た人は、古の菅原道眞であつたらう。

海ならず漂ふ水の底までも

きよき心は月ぞてらさん

清明明徹

老境に入る

の一吟を味はつて見れば、公の心は清明明徹である。何の犯した罪も無いのに、右大臣の高官から落されて、大勢の子ども散りくばらく、稍老境に入つた身を以て、筑紫の果に棄てられた當時の公の境遇には、何人も深く同情しなければならぬ。公の行は餘りに月の様に明白であつた。公の心は餘りに月の様に皎潔であつた。公が秋月に問ふといふ詩には、爲問未曾告終始。被掩浮雲向西流。とある。公の左遷は公の光明を嫉んだ浮雲の所爲である事は、昔も今も知らぬ人は無い。公が月に代つて答へる詩に、天迴玄鑒雲將霽。唯是西行不左遷。と自ら慰めて居るのや、秋夜の詩

皎潔

光風霽月

(一)延喜元年。



(詞繪起緣野北)公菅の所配

に月光似鏡無明罪。とあるのを見ては、公の心は光風霽月、何等一點の疚しい所の無いのが分る。九月十日(一)の夜、月影清く、蟲の音涼しい配所の秋には、前年の御遊をおもひ出して、

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。

口吟

慰藉
心づくしの
月影

と口吟せられた。かつては九重の雲居の上に見た月を、今は配所の月とながめられた公の心事は察するに餘りあるが、公の様な偽の無い心を以てこそ、月に對しての問答も出来るのである。公が配所の慰藉は梅よりも、菊よりも、家郷の書信よりも、恐らくは心づくしの月影であつたらうと思ふ。

なか／＼に心づくしの浮雲も

光を添ふる有明の月

本居春庭^(一)

^(一)徳川時代の國學者。本居宣長の子。文政三十八年(二四六)歿。年六十六。

^(二)元正天皇の時の人。靈龜三年遣唐使となりて支那へ赴

五 月光と古人 其の二

二 安倍仲麿^(一)

き、我が寶龜元年(一四二〇)彼の地に歿す。年七十。

天涯萬里

切實

都の月、筑紫の月、同じ人も見る境遇によつて其の感は様々である。菅公の胸中人を怨みる心なく、世を憤る心もなかつたが、おもひ一たび故郷の親しい人の上に及んでは、堪へがたい悲哀の念も湧いたであらう。況や天涯萬里、波の外なる外國にあつて故山を思ふほど、切實な感慨はない。月は同じ天邊の月である。我が思ふ人も、我を思ふ人も、ひとしく同一の月を眺めるのである。月の光は同じいけれど、月の照す風物は同一ではない。むかし安倍仲麿が唐土にあつて歸國しようとした時、

あをうな原ふりさけ見れば春日なる

あをうな原

(一)支那唐の詩人。字は摩詰。
(西曆六九九一—七五九)
(二)支那唐の大詩人。字は太白。
(西曆七〇一—七六二)

萬死に一生
海底の藻屑

(三)印度支那東部の國。

三笠の山に出でし月かも
の詠歌には、王維、李白の徒までが泣いたといふ。當時
の交通は今日のやうに容易ではない。遣唐使の乗る
船は三船といつて、三つの船を出した。これは海上の
危険が多いから、萬一を慮つたのである。遣唐使の船
出は、萬死に一生を覺悟したうへである。難破して海
底の藻屑となつた人も澤山あつた。此の危険を冒し
て海外に行つたのも、當時の支那の文明を日本に輸
入しようといふ熱心の爲であつた。仲磨は靈龜二年
船出して、暴風に逢つて安南近傍へ押流され、それか
ら更に支那に入つたが、遂に日本へ歸航する機會を

故山

(一)李白の詩。

失つて、彼の地で死んでしまつた。かの三笠山の歌を
思へば、どの位、一度故山の景色が見たかつたであら
う。長安一片月。萬戶擣衣聲。此の夜景を見る毎に、想は
常に繪のやうな青によし奈良の都に飛んで居つた
のであらう。李白が仲磨を哭する詩、

日本晁卿辭帝都。征帆一片繞蓬壺。萊
明月不歸沈碧海。白雲秋色滿蒼梧。

六 讀 書

坪内逍遙

常に良き著書に親しむものは、唯獨り居れども寂
しきことを覺えず。師を求めざれども日に月に學ぶ

安部仲磨
ハミ、ミ、ハミ
衛ト云フ。

順境
逆境
庇護

Cicero.
羅馬の政治
家。西曆紀元
前一〇六—
四三

所あり。失意にも慰み、不平憂悶も之を忘る。書は少年の滋味にして、老年の娛樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰安とを與ふ。外に出てたる時も邪魔とはならず。家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴と、羅馬の名士キケロの言ひしも同じ心なり。されど、かくの如きは、吾人が讀書より受くる最大なる利益にはあらず。

諺に、百聞、一見に如かず。といへるは、何事も其の身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命限りあれば、七十、八十まで生きてたりとも、目に視、耳に聽くことは、幾何もあるべからず。我が日本國內の

思索

山水、風俗だけにてても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮なきを思へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小さく、且少かるべきは、言ふにも及ばぬことなり。さればこそ、今も昔も、苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を觀んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗に努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得て、之に親しまんことを願ふなれ。いはゆる名著は、人間世界開けて此のかた、凡三千年間に出でたる大賢高德、碩學、大才の經驗、觀察、思索、想像を、其のまゝに、又はランビキにかけて備へたるものなり。或は顯微鏡、望遠鏡に

一斑ヲ見テ
金豹ヲ見。

一斑を窺ふ

譬ふるも可なり。素より人工に成りたるものなれども、人をして肉眼にて看得ざる微かなる物をも、遠く且大なる物をも看取するを得しむ。後れて生れたる者にして良書の助を借ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅かに一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑すらも、正しく明らかには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、かねて智を研く砥石なり。併しながら、讀書の要は尙これに盡きたるにはあらず。

伊太利の詩人ペトラルカは曰く、予に良友あり。彼等は皆名士大家にして、いづれも偉業をなしたるも

Petrarca.
(西曆一三三〇—一三七四)

啓發

Channing.
(西曆一七八〇—一八四二)

俊傑

吐露
Milton.
(西曆一六〇八—一六七四)

のなり。予若し其の助を藉らんとせば、彼等は喜んで我が請を容る。と。これ良書が常に其の讀者を啓發し、指導し、鼓舞し、奨勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも曰く、吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、主として書籍の媒介に因る。而してかゝる價知らぬ交際的手段は、衆人の自在に用ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑吾人に向ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す。と。英國の詩人ミルトンも亦曰く、良書は保存して後世に備へられたる俊傑が貴重なる生血なり。と。

私淑す

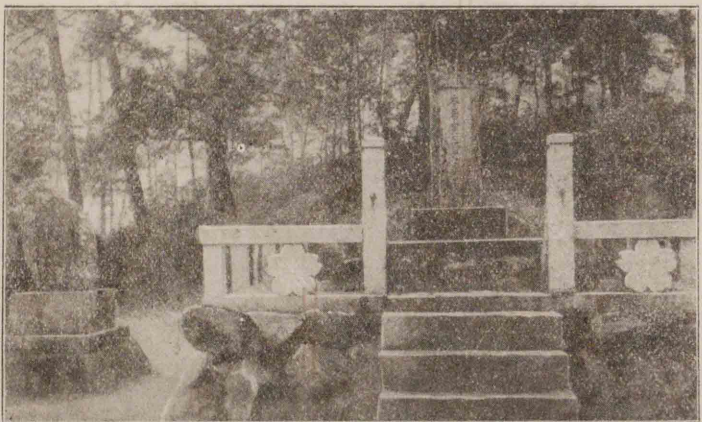
人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なること、かくの如きものあるかと歎ずるなり。若しかりそめにも、其の偉なるもの、美しきもの、清きもの、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に、月に力め行ふに至りなば、書用の極れるにちかしと謂ふべし。

効用此上モナク云フベシ
— 中學修身訓 —

(一)本居宜長は伊勢國松坂の
人。徳川時代の
に於ける國學
の大家。享和
元年(二四六
一)歿。年七
二。

七 本居翁の遺蹟

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺めゆ



本居宜長の奥の墓

く楽しさ。早稻田は已に刈盡したが、晩稻田は金色に波立つて、豊年の喜を見せて居る。一里以上の路を往復するらしい一年生位の小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つて居る疎な小松原の道を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何、此の山は何。お墓はあそこの山の茂みの處です。と車夫の語るのを

小暗い

九十九折

聞きながら、いつしか山室へ着いた。車を捨て、爪先上りの阪道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に慣れた目や耳には清らかに珍しい。杉、松、椎などで小暗い路を稍四五町も上つた處に、浄土宗の寺がある。妙樂寺といつて、翁には深い關係のある寺である。それから右へ左への九十九折を喘ぎく、六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪位が平地になつて居る。其の中央の小高い盛土が即ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。本居宣長之奥墓と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何も無い。翁の墓の左手に圓い石があ

(一)羽後國秋田の
人。宣長の弟
子。天保十四
年(二五〇三)
平(二五〇三)
手(二五〇三)
歿。年六十八。

つて、平田篤胤大人の、

なきからはいつくの土になりぬとも

魂はおきなをの許に行かぬ

と鑿つたのが立つて居る。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事は無い。しかも數多の門弟子の中で、ひとり翁の傍に侍つて居られるのは、さぞかし満足のことであらうと思ふ。此の墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して生前に占定して置かれたのである。其の承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は、今尙同寺で珍藏して居る。

占定す

山室の山に千年のやどしめて

かぜに知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのは此の時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事の無い後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

百年の世は隔つれど教へ子に

かづまへませとをがみ額づく

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。其の著書の卓絶な學術上の價值と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものは無い。

感慨無量

かづまふ

卓絶

永劫

見はるかす

檀那寺

此の墓地は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類が無い。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張等の崎々、山々。近くは松坂町を眼下に見る。「富士の山もいつもはちやうどあのあたりに見える。」とホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此處の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁は折々此處に遊ばれたのである。松坂へ歸つて城跡の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅が其の儘で保存せられて

遺愛の物

稿本

襟を正す

舊態

(一)今の戸主。翁五世の孫。

居る。又新しい倉庫には翁の自筆の草稿、遺愛の物、醫
業用の藥箱なども陳列されて居る。どの稿本も丁寧
に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人
をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあ
つたのを、市中で火災の虞もあるから、保存會で此の
舊城址の一角に移したのである。併し庭の樹木、置石
まで、一切舊態を存するやう苦心したといふことで、
本居清造といふ表札まで、其の儘になつて居る。臺所
の竈も、井も、便所も、舊の儘の形が残されて居る。下が
抽斗になつて居る小さい階子段を上ると、二階が四
疊半の書齋、其の床の柱に三十六の鈴が六つづつ六

(1)Wimar. 獨逸國の首都
(2)Schiller. 獨逸の有名な詩人。西曆一七五九—一八〇五)
對比

段につながれて懸つて居る。これは模造品で、本品は
陳列庫に在る。これが即ち翁が一切の著書の述作せ
られた場所で、此の四疊半から日本全國を吹靡かす
風が舞起つたのである。西向の窓から差込む夕日は、
さぞ堪へ難かつたらうと思はれて、此の質素な家居
の様が、いよく、翁の人格を大ならしめる。獨逸のワ
イマルで、ゲーテやシルレルの舊宅を見た時にも、
其の偉大な事業と、其の質朴な家居の状態との對比
を面白く感じたが、此の鈴屋の遺蹟には、一層感を深
うした。ゲーテ、シルレルの舊宅を見た時は、日本にも
かういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだ

豁然

思つたが、今やそれが實行せられて、まづ之を翁の舊宅に見ることを得たのは、誠に悦ばしいことである。此の公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高の威嚴を加へた。我が國に翁あるは、我が國の誇、松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したものは無い。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が、神宮風の様式であるのは一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさ、此のあたりの櫻の木が幾本ともなく返咲をして居る。宿の主人の話に、先年東郷大將の來られた時も、返咲を見られて、さすがに本居翁の郷土故、櫻は一年

中咲くのだらう」といはれたといふ事である。

櫻木にゑりし百千の卷々ぞ

かぜに知られぬ花にはありける。

八 晚秋初冬

徳富 蘆花

一

霜降り、木枯吹きはじめてより、庭の紅葉、門の銀杏、頻に飛びて、晝は書窓を掃ふ影鳥かと疑はれ、夜は軒を撲ちて晴夜に雨を想ふ。朝起き見れば、滿庭皆落葉。眼をあぐれば、さても瘦せたり。楓の梢、錦は地に散りしきて、梢には昨夜の紅葉に残されし二葉三葉四葉、心

細氣に朝日に光り、昨日まで黄金の雲と見し銀杏も、今朝は膚薄う骨あらはれ、晩春の黄蝶にも似たる殘葉の、猶此處彼處に縋りつきたるも哀れなり。

二

この頃の晝こそいと静かなれ。朝は霜、夕は風のさすがに寒けれど、晝は空青々と高く澄みて、日光清く美し窓に對して書讀み居れば、都に住むとしも思はれぬばかり静かなるに、時たま障子にうつる物の影、何ぞと障子開くれば、庭のキナウ杏樹の葉は落ちて槎枒たる枝の、縦横に青空をはさみたるに、梧葉にや大きな枯葉の一つ落ちかゝり、猶落ちもやらで、静かに日

槎枒

光に光りたるもをかし。

庭も寂びぬ。霜枯の菊俯きて影を落し、鳥の啄み殘せる南天燭の實の、金剛纂の下に紅う照れるも、華やかならずしていと寂びたり。雀三羽庭に下りて餌をあさる。縁には老猫の日を浴びて眠りぬ。蠅一つ飛來りて、障子を這ひあるく音がさくと聞ゆ。

三

邸の内も寂びぬ。栗も、銀杏も、桑も、楓も、棕も、榎も皆落葉して、月夜には其の影限りもなく地に亂れ、踏分け兼ねる心地す。落葉焚く煙邸内の其處此處に立上りて、茶の花ほのかに香る夕、はらくと時雨、栗の落

(一)「芋洗ふ女西
行ならば歌詠
まん」(芭蕉)
暮雨蕭々

葉をたゝきて、ぼんやりとたそがれ行く頃は、西行な
らば歌詠まんとぞ思ふ。暮雨蕭々、今行過ぎし傘より
音一入まさりて、世は此の雨の中に果つべく思はる
る夜は、默然として吾に伴ふ吾が影も哀れなり。

四

月色のほのかなる夜に、ほの白き銀杏の落葉を踏
みて庭に立てば、月一しきり薄れて、はらくと木の
間洩りくる二點、三點。時雨かと思へば已に止みて、ま
た月になりゆく。此の趣誰にか語らん。

月なくて、寒星空に満つる頃、木の下に寂然として
佇めば、夜氣凝りて動かず、良久しうして大氣少しく

ふるひ、頭上に枯梢の相ふるゝ音あり、足下に落葉の
がさりとといふ響あり、一瞬にして止む。星の語れるに
や、あらずや。

人籟
至上の聲

月霜の如く地に冴え、風海の如く空に吼ゆる夜は、
人籟すべて絶えて、直ちに至上の聲を聞く心地す。

——自然と人生——

九 桶屋の思案

石川 雅望

よろぼふ
ひはだ屋

都の端つかたに、桶を造りて賣る男あり。秋のころ
風烈しく吹出でて、よろぼひたる家を打倒し、木の枝
をさへ折り裂きなどす。

ひはだ屋の板のはがれたる
梅皮

が空に飛びかふさま、さながらたむけの神に幣はひまゐ
 らする心地す。桶づくり妻に向ひて、わが家たかたからに
 富むべき時來ぬ。疾く神の御前にみわ、稗米奉りてよ。
 といふ。妻、野分烈しかりとて、家の富むべき道理やは
 ある。希有の事いふ男かな。といへば、女はあさましき
 まで、物の心をたどり知らぬ者なり。むかし唐國に朱
 買臣といひし賢き人、わが身今に成出でなると言ひ
 けるを、その妻の聞きも入れて、終に別れけるが、程な
 く夫はいみじき位を得たりけるを、悔みつる例もぞ
 ある。すべて男の言へることを、悔りざまにもてなさ
 ば、よき事はあらじ。といふ。妻さらばかゝる風につけ

いみじき位

なでふ

て、なでふよき幸かある。といへば、夫がいはく、風荒く
 吹きぬれば、砂ほこり起りて人の眼に入るぞかし。さ
 れば目を病む人多く出來なん。これ喜び祝ふべきこ
 とにこそ。といふに、妻は愈いぶかりて、人の眼を病む
 が、いかで我が身の幸とはなる。と問へば、夫深く物の
 心たどらざる人は、其の由をえ知らじ。目を煩ふ人多
 ければ、よろせずば目つぶれて、かたはと成りぬべし。
 然るかたはになりなば、法師とこそなるべけれ。盲法
 師は、近き世に唐國より渡したる三絃といふものを
 弾きて、なりはひとすなり。さらば三絃世の中に行は
 れぬべし。これ我が爲によき幸の來れるなり。といへ

え知らじ

ありとある

ば、妻しか三絃の世にはやり行くとも、身の幸となるべうもなし。といふ。夫、そも三絃は、ねこまの皮もて作るなり。三絃のはやり行かば、世にありとあるねこまの限り殺されて、たね盡きぬべし。これよき幸のまぢかく來れるなり。といふを、猶いぶかりて問へば、ねこま死にたえなば、鼠時を得てはびこり、厨の棚座敷をいはず、こゝらの鼠ほこり騒ぎ、よろづの桶ども皆食破り、或は投落して碎き損ひつべし。さらば我が家に商物の數まさりて、富み榮ゆべきものなるはやと、手打ちたゝきて、をどり喜びけり。深きたどりある桶たくみにぞありける。

—しみのすみか物語—

こゝら

一〇 トラファアルガルの海戦 其の一

小笠原長生

天下を睥睨す
震懾屏息

ナポレオン一世身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨するや、列國の群雄皆震懾屏息して、其の部下に屬せしが、ひとり英國のみは孤立を守りて敢へて屈せず、其の島國たるを利用して、優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、しばく佛軍を悩ましたり。こゝに於て、ナポレオンは畢生の力を盡し、雄兵十五萬をブローニユに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮べ、まづ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、其の

Boulogne
佛蘭西の北部
英吉利海峡に
臨める海港

虚に乗す

粉碎す

⁽¹⁾Horatio

Nelson

(西曆一七五

五八

五)

天職

猖獗

⁽¹⁾Cádiz
西班牙南部の
海港。トラ
ファアルガル
岬は其の南方に
在り。
⁽²⁾Villeneuve.

虚に乗じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峡を一躍して英國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督⁽¹⁾ネルソンは、豫てよりナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以て、己の天職なりと確信し居たりしが、今ナポレオン大舉して英國を侵略せんとすと聞き、佛帝たとひ鬼神の術ありとも、其の海岸を距る一海里の外に出でしめじ。といひて、直ちに敵の艦隊を追尾して、カヂズ港の附近に到りぬ。時に佛國の提督⁽²⁾ヴィールヌーブ、西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して英國艦隊と戦ふ用意をなせり。ネルソン之を覺り、三十

⁽¹⁾光格天皇の文
化二年。

⁽¹⁾Colling-
wood.

餘隻の軍艦を率ゐ、進みてトラファアルガル岬の邊に達し、遂に敵の隊と相會す。時に西曆⁽¹⁾一千八百五年十月二十一日なり。

ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦隊を分ちて二隊の縦陣とし、副提督⁽²⁾コリングウッドをして其の一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に入すべきを命じ、みづからは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫してまづ其の一部を撃破せんとせしが、佛將ヴィールヌーブ之を察し、其の艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間にあたる點に後隊の各艦を列せしめ、相依

りて空隙なからしめぬ。

〔Victory.〕
 時に英國艦隊の旗艦ヴィクトリー號の上甲板に
 佇立せるネルソン、側なるブラックウッドを顧て、君
 は幾何の敵艦を捕獲せば、我が勝戦なることを是認
 すべきか。と問ふ。ブラックウッド十五隻を捕獲せば
 以て偉功となすに足らん。と答ふ。ネルソン頭を振り、
 「否、われは二十隻を捕獲するにあらずば、満足するこ
 と能はざるべし。」といふ。やがて其の室に赴き、正装し
 て燦爛たる數箇の勳章を胸間に懸け、肅然として天
 に向ひ、神よ、願はくは我が英國に赫々たる大勝を授
 け、全歐洲の人民を其の塗炭の苦みより救ひ給へ。願

塗炭の苦み

擁護を垂る



(筆ドローイング) 戦海のルガルフラト

はくは我が將卒をして一
 人も卑怯の舉動をなす者
 なからしめ給へ。併せ願は
 くは戦勝後我が軍の事を
 處する、一に仁慈を以てせ
 しめよ。ネルソンの一身は
 固より惜しむに足らず。た
 だ我が忠誠を憐みて擁護
 を垂れ給へ。」と禱りて、やが
 て甲板に出でたるに、敵艦
 愈近づく。英軍の意氣益壯

なり。ネルソン復ブラックウッドを顧て、なほ一信號旗の掲げざる可からざるものあり。とて、直ちに信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。

其の信號は、英國は各自が其の本分を盡さんことを期待す。といふことなり。英國總艦隊之を望みて、狂喜措くこと能はず、拍手喝采の聲、海波も爲に震はんとす。ネルソン莞爾として、今ははや準備に於て遺憾なし。餘はたゞ神と我が正義とを頼まんのみ。といひしが、やがて、接戦せよ。との信號旗は、檣頭高く掲げられたり。

狂喜措く能はず

旗艦ヴィクトリー號前驅率先して進みしが、着弾

意氣軒昂
眉宇の間に
溢る

距離に達するや、數隻の敵艦これに向ひて砲撃を始め、飛彈交、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウッド其の本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつゝ、余はまた速に本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる閣下の壯貌を拜すべし。といへば、ネルソン、われは既に國家の爲に一身を犠牲にせんとせり。再び相語ることを期せず。といふ。意氣軒昂、爽快の色其の眉宇の間に溢れたり。

一 一 トラファアルガルの海戰 其の二

時に副提督コリングウッドの旗艦ロイヤル・ソブ

Royal
Sovereign.

Santa Anna

好丈夫

索具

リン號は、其の艦隊の先登に立ちて、健帆風を孕みて、
 西班牙の戦艦サンタ・アナ號に向ひて進みしが、其
 の艦尾に達するや、二弾を重填せる左舷の大砲を一
 齊に發射し、忽ち之を撃破せり。ネルソン遙かに之を
 望み、欣然として左右を顧つゝ、好丈夫の意氣を見よ。
 壯烈鬼神の如し。といふ。既にして佛の諸艦、皆ヴィク
 トリー號を目蒐けて進み來りしかば、飛彈實に急雨
 の如く、艦體破壊し、索具斷絶し、兵士の戦死するもの
 頗る多し。然れども尙堅く忍びて一發も應砲せず、益
 進みて佛の提督ヴィールヌーブの旗艦を索む。ヴィ
 ールヌーブ之を避けんがため、殊更に將旗を掲げざ

看破す

Redoutable

りしかど、ネルソン其の陣形によりて、旗艦の第二位
 にあることを看破し、猛然之に薄り、まづ艦窓に向ひ
 て小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三弾を重填せ
 る左舷の大砲を一時に發射せり。波濤驚き、雲霧裂け、
 其の音百雷の一時に落つるが如く、敵兵四百、算を亂
 して殪れ、二十門の巨砲毀損し、艦體大破して、また用
 ふること能はざるに至れり。
 こゝにネルソンいよく奮戦して進み、右舷の諸
 砲を以て別に敵艦レズーダブル號を砲撃しつゝ、遂
 にこれに衝突せり。此の時に當り、英の諸艦長各猛進
 して佛艦と接戦し、兩軍の戦正に酣にして、奮闘殆ど

Hardy.

沮喪

一時間ならんとする折しも、レヅータブル號の檣樓より一發の銃丸飛來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて之を倒したり。衆駭きて相集り、直ちにネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーデーを見て、佛奴われを狙撃し、彈丸我が脊髓を貫けり。恐らくは復起つ能はざるべし。といふ。かくてネルソンは、我が負傷の一事、いたづらに兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に手巾を出し、我が面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室に入りぬ。時にレヅータブル號の兵士、艦上に襲撃隊を組み、將に突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射してこれを却け、なほ大小

砲を連發して其の過半を殪し、かば、彼等は力竭きて遂に降伏せしが、續いて敵艦の其の旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず。ヴィクトリー號の兵士、拍手歡呼して聲雷の如し。ネルソン治療室にありて之を聞き、思はず微笑せり。

ハーデーたま／＼ネルソンの側に來り、捕獲の敵艦十二隻に下らず。といへるに、ネルソン「我が艦の敵に降れるもの無きか」と問ふ。ハーデー聲に應じて、「一隻も無し」と答ふ。ハーデーやがて甲板に上り、一時間を経ずして再び訪來れるに、ネルソン其の艦隊をして投錨せしめんとの念切なりしかば、之をハーデー

殘喘なほ存す

に命ず。ハーデー、艦隊の運命は副提督コリンググウー
ドの指導に任せ給へ。」といひしに、ネルソン頭を振り、
苟も我が殘喘なほ存する間は、何ぞ指導の權を他人
に委せん。」といふ。

氣息奄々

耳朵

既にして薄暮に至り、佛、西兩國の聯合隊艦大敗し
て、砲聲全く収り、ネルソンの氣息も亦奄々たり。左右
口を其の耳朵にあて、全勝我が軍に歸し、敵艦二十
隻を捕獲せり。」と報ぜしに、ネルソン莞爾として、遂に
瞑せり。

—帝國海軍史論—

一二 海軍戰死者ヲ祭ル 東郷平八郎

和氣靄々

六親

大轟

海陸ノ戰雲已ニ散ジテ、滿都ノ和氣靄々タリ。童幼
歡ビ迎ヘテ、六親門ニ待ツ。是、諸子ト生死ヲ與ニシタ
ル將卒ガ、大轟ノ下ニ凱旋セル頃日ノ光景ナリ。回想
スレバ、諸子等ガ互寒ヲ冒シ、炎熱ヲ凌ギ、勁敵ト闘フ
ニ方リテヤ、戰局ノ前途ハ尙未ダ知ルニ由ナク、諸子
ノ逝ク毎ニ、マヅ其ノ忠死ノ榮ヲ得タルヲ羨ミ、我等
モ亦必ズ諸子ニ倣ウテ君國ニ報ユルヲ期シタリキ。
然ルニ諸子ノ勇戰奮闘ハ常ニ其ノ効果ヲ奏シ、皇軍
戰フ毎ニ勝タザル事ナク、旅順ノ連陣十閱月ニシテ
大勢ヲ定メ、日本海ノ鏖戰一舉ニ勝敗ヲ決シ、爾後海
上復敵影ヲ見ザルニ至レリ。是、固ヨリ無量ノ皇徳ニ

慶戰

基ヅクト雖モ、亦諸子が身ヲ外ニ忘レテ奉公シタルノ致ス所ナラズンバアラズ。今ヤ征戰其ノ終ヲ告ゲ、我等凱旋ノ將卒四顧歡喜ノ光景ヲ見ルニ當リ、諸子ト此ノ悅ヲ頒ツ能ハザルヲ懷ヒ、悲喜交至リテ、感慨言フベカラザルヲ覺ユ。然レドモ帝國ノ今日アルハ、即チ諸子が一死ノ榮アル所以ニシテ、諸子ノ忠烈ハ永ク我が海軍ノ精神ト爲リ、帝國ヲ無窮ニ守護スベシ。茲ニ典ヲ舉ゲテ諸子ノ靈ヲ祭リ、聊カ懷ヲ陳ベテ祭詞ニ代フ。尙クハ來リ饗ケヨ。

明治二十八年十月二十九日

聯合艦隊司令長官

東郷平八郎

一三 死中再生

櫻井忠温

予は幾多の死傷した部下に取巻れて、獨り横たはつた。此の時は予が生命を天地の間に享けた以來の最も悲痛な、又最も無心を時であつた。予はネルソンの言葉の「天に謝す。予は予の義務を盡したり。」を幾度も繰返して、事は假令成らなかつたとしても、予として茲に一代の務を終へたことを喜んだ。他には何事をも考へず、唯止め度無く迸り出る血潮が、生れて二十五歳の生命を刻々に縮めつゝあることを知るのみであつた。負傷の痛苦は毫も之を感じなかつた。敵

サハフ 作法

ザラサ 雑作

の若干は予の前方二三間の壕内を右に左に馳せめぐり、一人て五六挺づつも銃を引受けて、我が残兵に向つて狙撃しつゝあつた。

予は目を見開いて彼等の動作をうちまもつて居た時、後を振向いた一人の敵兵は、予がまだ生きてゐるのを見て、他兵に目配をする間もなく、三四發ドンドンと撃ちかけた。而して劔を揮ひ、跳り上つて進み寄つた。予は目を閉ぢた。予は將に突殺されようとしたのだ。嗚呼、此の身は鐵石ではない、而も四肢は擡けて戦ふ力も盡きた。予は、どうして之を禦ぎ之を追ふことが出来よう。予は將に豺狼の毒牙に劈かれよう

としたのである。併し天は尙未だ予を棄てなかつた。嗚呼、此の刹那。此の瞬間。予は耳近く接戦の聲を聞いた。ただけで、名もない蠻奴の劔尖から免れた。敵兵が予を目かけて跳り上つた刹那に、我が残兵の五六名が飛掛つて、白刃はこゝに亂れ合ひ、鬪つて共々に斃れた。かうしてたゞ死を待つばかりであつた予の息の根は、可憐な戦友の生命に代へて、辛くもつながれたのである。

折しもあれ阿修羅王の勢でどつかと圍壁に立上り、銃劔を高く差上げ、喊聲を放ちつゝ、敢然として跳り込んだ一兵卒があつた。予は彼の猛勇と剛膽とに

倒ル 仆ル 僵ル 裂ル

死を睹るが如し

觀念の眼を閉づ

介錯

噢、驚おどろくした。嗚呼あゝしかし、彼は何處よりか飛來つた敵彈に忽ち撃止められて崩るゝが如くに予の右側に僵れかゝつた。死を睹ること歸するが如しとかや。彼は寧ろ死を求めんが爲に最後の喊聲を張揚げ、健氣にも唯一人敵中に跳り込んだのであつた。

稍あつて我が軍から發する砲彈は、盛に予等の頭上で破裂し始めた。着發彈は予等の身邊に落下して血煙を揚げた。或は足、或は手、或は首が眞黒に寸斷せられて飛散つた。予は觀念の眼を閉ぢて、我が砲彈の爲に一思に粉碎せられることなら、それこそ遺憾なき介錯なれと念じて居たが、予が肉、予が骨は、尙其の

目も
鼻も
舌も
喉も
を
さ
す

幹竹割

碎破する所とならず、小破片のみが予の手足を傷つけた。予が左足の邊にゐた一頁傷兵は、此の砲彈の破片で、顔の眞向から幹竹割に劈かれて、足搔き藻搔き虚空を攫んで苦しんでゐたが、やがて俯伏せになつて息は絶えた。

暫くしてまた頭上で、「日本帝國萬歲」と呼ぶ聲が聞えた。目を開いて微かに一瞥すれば、嗚呼、彼もまた傷ついた狂者であつた。神魂は既に喪失しながら、口にはなほ狂はしく萬歲を呼んでゐたのは悲壯である。彼は頻りに萬歲を唱へ、また「日本兵來い」と絶叫した。攻むるに殘卒無く、援くるに生兵なき今曉の慘戦

には、彼もまた其の悲を共にしたのか。彼は叫び狂ひ、
狂ひ疲れて、果は唇を嚙んで色を失つた。予は目を閉
ぢた。

數個所の傷口から流れ出る予の血潮は、殆ど全身
を朱に染めなした。繃帯を卷附けたのは唯両手ばか
り、他は其の儘に打棄て、あつたのだ。予は目を閉ぢ
ては靜かに思ひ、目を開いてはじろくくと見廻した。
左右を顧ると、翻翻たる日章旗の下には、斃死した二
人の我が兵があつた。思ふに此の地點は、此の勇敢な
二兵によつて占領せられた後一の中立地帯となり、
我が兵到らば敵の砲火に碎かるべく、敵兵現れなば

翻
翻

我が砲彈の斃す所となるのであらう。此の二勇士は、
自ら占領の功を遂げ得たのを喜んで、笑つて瞑目し
た。のでは無かつたか。これこそ實に一篇の活きた詩
では無からうか。嗚呼、美しい言葉を以て此の二勇士
の事蹟を弔はうとする詩人は無いであらうか。

予は段々息苦しくなつた。絶命の期ももはや遠く
ないと感じた。其の時予の胸倉を擱んで引上げたも
のがあつたが、すぐに又手を放した。予は微かに目を
開いて見ると、二三人の露兵が坂を登つて行つた。予
は危く俘虜たる耻辱を受けようとしたのである。敵
が予を擱み、又予を棄てた此の一刹那、これぞ生死の

め
生死のけぢ

けぢめ、榮辱の境であつた。敵は一旦予を掴み上げたが、^{差別}もはや死んだ者と信じて棄てたのであらう。それも其の筈、予の全身は鮮血に浸つて居たのである。時に何者か予の右側へちよこくと走り寄つて、無言の儘に倒れかゝつた者があつた。死んだのかと思へばさうではない、死んだ真似をしてゐるのだ。暫くする中、彼は予に叫いた。

「歸りませう。」

予は絶えぬに苦しい呼吸の中から彼を見れば、ついで見知らぬ一兵卒であつた。其の頭には繃帯を施してゐた。予は彼の情のある言葉に對して、かうなつ

てはとても自分は生きて還ることは出来ぬ。それよりか殺して歸つてくれと頼んだ。併し彼は予の生命を全うして連れ還ることはおぼつかないかも知れぬが、死骸だけでも取つて歸る。敵中に棄て、置くことは出来ぬと言ひながら、予の左手を握つて、其の肩にかけたのであつた。

―肉 弾―

一四 樂 地

幸 田 露 伴

如何なる處にも樂しき地はあるべし。又如何なる處にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流る、春の日に當りても、心よき

寂びたる趣
興を涌かす

金殿玉樓
茅店草屋

事のみ懐に満つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみ胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌し、ぬく灰はたく焼芋の煖きに笑むをかしさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、いとく樂

一枚紙ニモ
裏表アリ

（たかりく面割
なりまます）

身を賦す

しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければなり。樂しき處、樂しむべき處を見出し得れば、如何程窮苦不快の中に在りても、人は自らに勇氣を得て、苦中の苦に耐へ忍び、やがて人上の上となり得ることもあるべし。さなきまでも、樂しからぬが中に、樂しき地を見出さんことを常に心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も潤く、氣もゆたかになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。樂地を見出すべし。努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を登り行きける折、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高く重かりければ、二人とも憊れ苦しみて憇ひけるが、苦しみの餘りに、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬは無けれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむ程は我も亦苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれ

身撓んで心
撓まず
一路兩人
一境兩狀

かよし。さらば數多き行商人は、皆半途より身も憊れ、心も弱りて歸り去るべし。其の時、我一人如何にもして山の彼方に到り、思ふが儘に商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」といひけりとぞ。同じ苦難の中に在りても、よく樂地を觀る者は、身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀、よくく思ひ味はふべきなり。——洗心録——

一五 板倉重宗

新井白石

周防守重宗は勝重が嫡男なり。元和六年三十六歳にて、父が薦に依つて京職在に補せられ、職に在りしこ

(一)周防守重宗。
京都所司代。
明曆二年(二)
三十一。歿。年
六十。

と凡そ三十餘年、人の敬ふこと神明の如く、愛すること亦父母に似たり。父も子も同じ名臣にて、君の寵恩最も厚かりけり。

この人の職に在りし時の名譽、天下の稱する所、擧げて數ふべからず。職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にて遙かに拜することありて、決斷所に至る。此處には茶臼一つを据ゑおき、明障子を引立て、その内に坐し、手づから茶挽きな細障子を聽分つ。人皆この事どもを不審しあへり。されども問ふことも得ならずして過ぎぬ。遙か年經て後、問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所に出づる時に西面

明障子

見聞
視聽
心
手
見
子
見

京都の西北愛宕山上にある愛宕神社を祀る照大神等を祀る

祈誓

の^下にて拜することは、愛宕の神を拜するなり多くの神の中に殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きしからに、所願ありてかくは拜しぬ。其の所願といふは、今日重宗が訴を斷らん、心に及ばん程は私の事あらじ。若し過ちて私の事あらんには、忽ちに命を召され候へ。年頃深く頼み參らする上は、少しも私心あらんには、世に永らへさせ給ふなと、日毎に祈誓するに候、又訴を判つ事の明らかならぬは、我が心の事に觸れて動くが故なりと思ひな田ノシマフしぬ。よき人は、自ら動かさざらんやうこそあらめど、重宗それまでのことは叶ひ難く、唯我が心の動く静かなるとを試みる

には、茶を挽きて知る。心定まりて静かなる時は、手もそれに應じて白の廻ること平かにして、きしられて落つる所の茶いかにも細かなり。茶の細かに落つる時に至りて我が心も動かぬを知り、その後漸くに訴を判つ。又明障子を隔てて訴を聴くことは、凡そ人の面貌を打見るに、憎さげなるあり、憐がましきあり、又かたましきあり、その品多くして、幾何といふ數を知らず。見る所誠しき人のいふ事は誠と聞かれ、かたましと見ゆる人の爲す事は、何にても皆詐と見ゆ。又憐がましき人の訴は、曲げられたる所あるよと思はれ、憎さげなる人の争は、僻事ひがことならんと覺ゆ。此等の類は、

かたまし

我が目に見る所に心の移されて、彼が言を出さぬうちには、や我が心のうちに、邪ならん正しからん、曲れるならん直きならんと思ひ定むる程に、訴の言を聴くに至りては、我が思ふ方にその事を聴きなすこと多し。訴のなるに及びては、あはれがましきに憎むべきあり、憎さげなるに憐れなるあり、誠しきに偽なるが多き事、この類多し。人の心の知り難き、容を以て定めんこと叶ふべからず。古の訴を聴くには、色を以て聴く事あり。それは覆はるゝ所なき人の事なるべし。重宗が如きは、見る所について心覆はるゝ事多し。又さなきだに、訴の庭に出でんには恐ろしかるべきに、

まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせくて
自らいふべき事も得いはず、罪にも科にもあふ人あ
らんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには
若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候と答へし
となり。

—藩翰譜—

一六 伯林だより

徳富蘆花

(一)大正八年。
(二)Jerusalem.
亞細亞トルコ
のシリアの
都。
(三)Port Said.
地中海より蘇
西運河に入る
入口の港。

隨分永らく御無沙汰を致しました。私共は去六月
中旬エルサレムを立ち、其の下旬にポートセツドで
講和條約調印の報に接しました。それから伊太利に
二月、巴里に二週間、瑞西に二週間、瑞西から獨逸には

逗留

(1)Homelike.

(2)Nazareth.
亞細亞トルコ
のシリアの
都。
土着

懸念

いり、伯林に来て二週間にあります。小さなホテルの
裏二階に、二週間の逗留は案外氣樂で、恐らく今まで
經て來た何處よりも、ホームライクの感があります。
然し明日は其の伯林にも別れて、白耳義を經て巴里
に歸り、それからそろく、英吉利に渡る筈です。
耶蘇の郷里のナザレ及び其の附近には、可なり獨
逸人が土着して居ます。壯年の男達は兵になつたり、
捕虜になつたりして、老人や女子供ばかり淋しく暮
して居ます。ふとした縁から、其の一二家族と懇意に
なりました。皆獨逸の前途について懸念して居ます。
私はこんな話を彼等にしました。

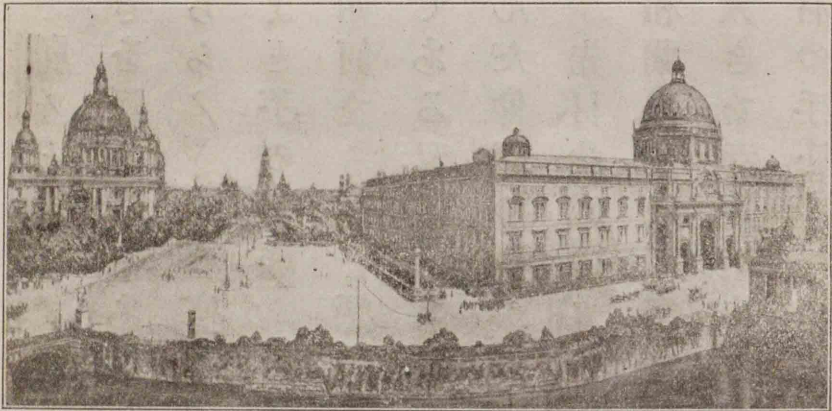
私は東京の郊外に住んで居るが、あの邊では百姓がよく寒中になると、麥踏をやる。十月末に蒔いた大麥が、綠芽を吐いて二寸にもなると、ひどい霜が來る。麥は根あがりになる。そこで百姓が銜煙管で頬冠り、後手を組んで、ひよいひよい麥を踏みつけて行く。踏めば踏むほど麥の株は勁くなり、太くなり、而して來年の實入りが多くなる。踏まぬとひよるひよる根あがりになつて、實入りが少い。自然はよくこの筆法を用ひる。五十年前には獨逸が佛蘭西を踏んだ。今度は其の佛蘭西が英吉利、亞米利加、伊太利、日本まで引張つて來て、一所懸命骨折つて獨逸を踏んだ。獨逸の

自分持ッテ
居ルツ所
ヲ命がケテ
寺ル。

Mark.

沈痛

Kaiser.



伯 林 宮 殿

前途は多望ですと。

私は其の獨逸の眞中に來て、少しも前言を改むる必要を覺えません。獨逸の前途は正に多望である。其の田舎を通れば、野良には女が多く働き、其の都會には片手、一本足の乞食が多く、卵一個が二馬克もして、見る程の人間は、皆まだ榮養不良な沈痛な顔をして居ます。カイゼルの寫眞

麗々

杞憂

を麗々と掲げて居る家もあれば、街頭革命の畫はがきを賣る者もあり、富籤の廣告などが眼につき、此のちらく、雪の寒空の下に、三百萬の人の子が、うようよと芋の子洗ふやうにして居るのを見れば、獨逸は如何なるかと懸念も出るが、それは杞憂に過ぎぬのである。私は踏まれた麥の前途を疑はない。却つて踏んだ仲間の上が氣にかゝります。

先日此處の丸の内に往つて見た。主のカイゼルは和蘭に逃げて空宮になつて居る。此の皇居と直角に大きな寺院がある。其の正面入口の上に耶蘇の像が右の手を舉げて立つて居る。像の右に左の言が刻し

てある。

「見よ、我は世の終りまで常に爾曹と偕にあり。」
カイゼルは逃出しもしよう。然し獨逸の生命は決して獨逸を離れぬ。

獨逸は其の生命を一新し得る機會を與へられた事について、骨折つた百姓達に、眞實お禮を言はねばならぬ。

大正八年十一月一日の夕

伯林にて 徳富健次郎

— 日本から日本へ —

一七 簡易生活

衣食住に簡易である事は、日本人の美德である。上代の衣服には、曲玉の様を珠をかけた事が見えたが、これとても今日から見れば粗末なもの、しかもそれは高貴な身分の方に限られたらしい。他は概して今日の朝鮮人の様に、飾の無い白い服だけで、何等の装飾も無かつた。随分文明の發達しない野蠻人でも、装飾を好む國民は、鳥の羽を附けたり、獸の皮を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風が無い。本來が食物住居共に簡易に甘んずるといふ風がある。文明の進むに随つて、種々の贅澤ヨウソクモツの進むのは自然

人トモイハス
ス、キトシ
道

施政

の事で、奈良時代、平安時代と段々生活程度の進んで來たのは事實である。平安時代になつて驕奢キウセに流れたといふ。藤原氏など上流社會の者が奢侈セウジに流れたことはあつたが、朝廷が驕奢をなさつて下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。皇室は禮儀、道德、風雅等の淵源であつたが、儉約の徳に於ても、朝廷がやはり模範となられたのである。

鎌倉になつての幕府の政は、全く勤儉キンケンで押通した。頼朝は衣服に於ても自ら其の例を示して居る。何事も質素簡易を旨とするが、幕府施政の方針ホウシであつた。それ故鎌倉時代の話として傳はつて居るのには、儉

(一)北條第五代の
執權。弘長三
年(一九二三)
殺年三十七。

時代精神

條文に立つ

約に關することが多い。中にも北條時頼の儉約であつたことは、徒然草に味噌を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ話がある。時の執權としては實に儉約なことである。其の母の松下禪尼が明障子の切張をしたことも徒然草にある。時頼の用ひたといふ青砥藤綱といふ人が、十文を落して五十文の松明をとぼして拾つたといふ儉約な話も、やはり時代の精神を示して居る。儉約をして、何かの時には役に立たさうといふので、平素は麁衣麁食に甘んずるといふことは、武家を通じての教訓である。足利時代になつての各家の家法家憲ケキケンともいふべきものは、いづれも儉素を儻

文に立て、居る。

擯斥

淡泊洒落

足利將軍の驕奢といつても、何程の事でも無かつたらうと思ふ。金閣、銀閣を見ても大抵は察せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づくものは、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配して居た。即ち高尚といふこと、又風流とか風雅とかいふものは、富貴に遠ざかつて、寧ろ簡易な生活に在りとの思想が流行したのである。俳人は和歌者流に對して起つた一種の平民的文學者であるが、これも淡泊洒落を以て其の道の眞意を得るものとした。足利時代の連歌者流にも既に其の氣風が認められるが、芭

借衣ヨリ
洗衣

閑寂

蕉の説くところ、俳味は奈良茶にありとした。奈良茶といふのは茶粥である。俳人中には品性の悪い幫間的の者もあつたが、芭蕉の風流は淡泊な生涯を風流としたのである。

右の通りであるから、俳人は其の家の節に美しい金ぴかの物を用ひない。すべてが閑寂な味を以てして、一椀の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざして趣味を其の中に求める。物の多くを望まず、少しにして足る。富の眼を眩するを望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳諧者といひ、いづれも隱遁者、世棄

人に似て、實は世間に立交つて、其の榮華に心を惑はされまいといふ境域に達したのである。

佛教は國民を厭世的にするといふが、日本では寧ろ其のよい方ばかりがあらはれた。其の質素の風と、思ひきりのよい所、富貴を超越した點は、武士の決斷及び質素に影響したことが少くない。元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來することが多かつたらうと思ふ。

安心立命 始メカラコトキナク

此の祖先の風はいつまでも保存しなければならぬ。併し食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより儉約では無い。儉と吝とは似て非なるものとは昔の人

似て非

分を守る

も言つた。積極的にはたらく爲には、飯も澤山食はねばならぬ。唯分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ、麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ、白米を食ふのを勿體ないといふ。此の勿體ないといつて、身の程を守るだけは、いつまでも保存したいと思ふ。恭儉已ヲ持シて、成るべく新しい贅澤に遠ざからなければならぬ。

一八 我が家の富

徳 富 蘆 花

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。唯か**いふや**狭くして、かつ陋なり。と。家陋なりと雖も、**膝**を容るべく、**庭狭し**

永遠を思ふ

と雖も、仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此處にも照れば、四季も来り、風、雨、雪、霰かはるく、到りて興淺からず。蝶来りて舞ひ、蟬来りて鳴き、小鳥来りて遊び、秋蛩亦吟ず。靜かに觀すれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて、樹に満つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちら／＼と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

隣家に花樹おほし。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。

須臾

鬱陶

紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに満庭花の衣を着く。
仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山
吹の花あり、李の花あり。
庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき
白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の我が家に
開くは宜なりけり。

滾々

老李の背後に一株の梧カキあり。碧幹亭々として少し
の歪カガミなく、吾が如く直チカかれと教ふるに似たり。梧葉と
手水鉢の側なる八角金盤とは、葉濶うして、我が家の
雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の
滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人

欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつく、ぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、
山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃えいで、唯一株
前の家主の植遺したる黄菊も咲出づ。名苑の花美し
といふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は却つて我が庭の
枝エダにあるべし。蛻巖の翁おきなならば、獨憐細菊近荊扉しんげいと
吟うたぜん。耻はづかづらくは海内文章落布衣らくふいと唱すべき身
落布衣らくふい文章落布衣らくふいと唱すべき身

翻々

屋後に一株の銀杏ぎんぎょうあり。秋深くして満樹金よりも
黄なり。木枯の風起れば、其の葉翻々として飜り落つ。
半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭

は一夜に金色（シキキ）となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭に敷きつめぬ。

木の葉落盡してはさすがに寂しげなれども、日影、月影いよく、多くなりて、空を見、星を見るに、障少きは嬉し。

— 自然と人生 —

一九 雪

朝（一）ぼらけ有明の月と見るまでに

よし野の里にふれるしら雪

これは降積んだ雪を朝戸開けて月と見まがつた

（一）古今集、坂上
是則の歌。百
人一首にもあ
り。

大空を傾け
る

のである。降積んだ雪も美しいが、大空を傾けて盛に降りしきる雪景色は、月には見られぬ眺である。雪似（一）鷺毛飛散亂。人被鶴（一）竝立徘徊。と白樂天は歌つた。銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに、見て居る中に乾坤すべて一白。氷山峨々たる北國の地では、面白いよりも寧ろすさまじい景色であらうが、我が國の秀麗な山川を降埋める變化の奇觀は、芭蕉翁でなくて

乾坤すべて
一白

いざさらば雪見に轉ぶ處まで
の感（一）を起す。さはいへ

こま止めて袖打拂ふ蔭もなし

（一）新古今集、藤
原定家の歌。

佐野のわたりの雪のゆふ暮
にはさびしい感がある。雪の降る日は寒くこそあれ。
雪の風流は稍冷たいものである。川柳子は

雪見にはばかと氣の附く處まで

と言つた。

安藤冠里は大名で、俳句の達人であつた。雪の朝酒
屋の小僧が、跣で街上を往還するのを見て、

雪の日やあれも人の子樽ひるひ

暖衣飽食、食ふに魚あり、出づるに輿ある大名の身分
として、下をあはれむ此の心がなくてはならぬ。風流
も仁恕の道に合しなればならぬ。

(一)名は信友。磐
城國平の藩
主。享保十七
年(一三九二)
歿。年六十二。

食ふに魚あ
り、出づる
に輿あり

仁恕の道

みやび

同じく俳人の西島といふ人、夕方から降りしきる
雪の景色の面白さに、いざ雪見に出かけようと丁稚
に供を命じた。西島の妻は、風流の心ある人には、雪見
も面白からうが、みやびを知らぬ丁稚の身にとつて
は、どれ程つらからう。自分の子ならば、よも供にはつ
れられまい」と、

我が子なら供にはやらじ夜の雪

西島手を拍つて、此の名句を得たれば、今日の雪見は
十分である。最早出かけるには及ばぬ」と言つたとは、
此の妻にして此の夫、かくてこそ風流の眞意を知つ
たものと言つてよい。

(一)醒開天皇。

むかし延喜の帝は、雪の降つた寒夜に御衣を脱せられて、聊か民の苦を思ひやる。と仰せられた。古事談には一條天皇にも同じ話を傳へて居る。此の仁慈の御行は、よく臣民を感泣せしめるに足りる。昭憲皇太后の御歌に、

あや錦とり重ねても思ふかな

寒さおほはん袖もなき身を

仁愛の御心は同じである。

二〇 歳の暮

三宅雪嶺

幼時は日月の過ぐるの遅きに堪へず。稚子慇懃向

白駒の隙を
過ぐ
恍として夢
の如し

所以

人間。睡過幾日は新正。齡漸く長じて漸く其の速なるを感じ、更に長ずるに及び、今年は今年はとて暮れにけり。の感あり。又更に長ずるや、白駒の隙を過ぐるの歎あること愈切。遂に顧て恍として夢の如くなるに至る。時間に差なくして感情に差あること、亦甚だしと謂ふべし。かくの如きは種々の事情に由來すべけれども、其の主たる所以は、言ふまでもなく人事の忙閑如何に在り。

幼時は簡單なる遊戯を事とし、日に同一事を繰返すに止り、何事か單調を破るものあらんを望み、節供、祭日を悦ぶと同じく、歳末、年始をも悦び、頻に其の到

來するを待つ。漸く長じて爲すべき事多きを加へ、動もすれば日を忘れ、改歳を思ふこと随つて薄し。更に長ずれば従事する所の業務益々繁く、或は二三年に跨るあり、或は一層長きあり、數年に亘るが如きは、事業の完成を待ちこそすれ、歳末、年始に何の興味を覺えず、唯「またか」と言ふに過ぎず。

歳末、年始に重きを置くは、其のなほ幼稚なる時の事にして、長ずると共に之を輕んずる傾向あり。日月の過ぐるを忘るゝは爲すべき事業の多きが故にして、烏兔匆々を歎ずるは寧ろ其の人の爲に祝すべし。境遇に順なるあり、逆なるあり、憂慮の餘りに事を忘

烏兔匆々

るゝもあれども、多數の上より見れば、日常の業務に忙殺せらるゝなり。

されど四季の循環は昔日の如し。人皆寒暑を感ずる上は、全く歳末、年始を度外視する能はず。南郭(一)が徠(二)の許に年賀に赴きしに、其の蓬髮垢面にして滔々孫子を論ずるに會ひ、其の儘に辭し去りしも面白けれど、ジョン・アダムスが壯時日誌を記し、十二月末日に至り、今年何事を爲し、かを省て慙然たらざるを得ず、明年は大いに黽勉せざるべからず。といひしは更に面白からずや。

— 題言集 —

(一) 服部南郭。京都の儒者。寶曆九年(二四一七)歿。年七十七。
(二) 获生徠徠。南郭の師。享保十三年(二二三八)歿。年六十三。
蓬髮垢面
John Adams,
米國第二代の
大統領。(西曆
一七三五—
一八二六)

慙然

黽勉

二一 海上の忘年會

國木田獨步

陸に着かば、是非とも直ちに此の書郵便に託したく、卓上より轉げ落ちんとする硯を支へながら、左に十二月三十日に催され候海軍忘年會の景況概略を走り書き仕候。

此の日は早旦より空晴れて風なく、氣候暖にして誠に珍しき天氣ゆゑ、皆々今日の忘年會を幸福と喜び申候。

會場は神戸丸の甲板にて、周圍も天井もすべて布を以て被はれ候間、まづ大^(一)テントの如く見受け申候。十一時半頃小蒸氣に乗りて、士官諸氏と共に、吾が千

Tent.

代田の直傍に碇泊せる神戸丸指して參り候、すべて乗艦の新聞記者は、司令長官よりの案内を受け申候。神戸丸に着して梯を上り行けば、茲には接待委員の御方已に待受けられ、まづこれへと、直ちに喫煙室へ招ぜられ候。卓上には恩賜の煙草澤山備へあり、全艦隊に僅か七人の新聞記者ゆゑ、小生の如き服装のものは殆ど見當らず、入來る人も入來る人も、悉く長劔短劔の金鐵の響腰より起り、歡呼大笑は自ら軍人の磊落を現し、シガ^(一)の煙の蓬々として起る處、何時しか戦時殺伐の氣を沒了致候。其の後は如何に。「益此の通り、帽を取つて禿げたる頭をちよつと示さ

磊落
Cigar.

る、お方もあり。同じ艦隊とはいひながら、艦と艦との往來の不便は、知人屢相會する事を許さぬ故、久しぶりにて一堂に集りたる軍人諸氏の挨拶の一例此の如くにて、誠に忘年會を名にしたる懇親會のやうに見受け申候。

十二時に及び、豫て設けある食卓に就く。其の人員は、海陸合計四百餘名と承り及び候。もと此の會は海軍の催し故、陸軍の人々は只大連灣兵站部の將校のみにて、全く海軍より招待致したるものに御座候。海軍にては聯合艦隊司令長官を始めとして、士官候補生に到るまで大概出席致され、浪速艦分隊長御勤務

(一)東伏見宮。
(二)山階宮。

の依仁親王殿下及び吉野艦分隊長士御勤務の菊麿王殿下をも御見受申奉候。

①Biscuit.

扱外部は各國の軍艦旗、各種の信號旗を以て黃紅白様々に飾り、食卓は二列に並べ、卓上には軍用ビスケットの空罐を利用したる長方形ブリキ製の皿に、牛肉、豚肉、鶏肉を盛りて、所々宜しきに配置し、其他鰯の皿あり、握飯あり、麥酒の空壺を爛德利に用ひられ候など、すべて遠征軍の忘年會らしく、又と容易に實見し難き愉快なる光景を呈し居り候。

②Pocket.

思ひくゝに卓につき、思ひくゝに立食を始め候。而して思ひくゝにポケットより、思ひくゝの蓋を取出

(一)伊東祐亨。

し、申候。暫くして伊東司令長官大音に、天皇陛下皇后陛下の萬歳を祝せられ候間、一同之に和して萬歳を三呼致候。續いて陸海軍列席の將校及び艦隊従軍新聞記者の萬歳を祝せられ候間、一同之に和して萬歳を唱へ、又直ちに司令長官の萬歳を叫び申候。樂隊は始終勇壯なる調を以て興を添へ候。

宴の已に酣なる時、樂隊二十名許、様々に假裝して樂を奏し、列を作り、會場に足ぶみ揃へて入來りしに、思はず樂隊萬歳を唱へ候。四百人の視線は直ちに之に集り申候。

此の異裝せる一隊、會場を一周して船尾の空所に集るや、何とか申す舞蹈を始め候。とにかくこれが例の假裝舞蹈會ならんと、誠に面白く拜見仕候。率直なる陸海將校のうちには、長劔を引抜いて舞はるゝ人もあり、此のファンシー・ボール二三、此の日の大出来と一同大恐悅にてこれあり候。酒宴も追ひくゝ亂戦と相成候間、其の後の事は存じ申さず候。恐らくは遠征軍にて催され候宴會の中、最も盛大なりしものと存候。 勿々。

—愛弟通信—

(Fancy Ball.)

二二 元 日

夏 目 漱 石

雜煮を食つて書齋に引取ると、暫くして三四人來

(Melton.)

た。いづれも若い男である。其の中の一人がフロックを着てゐる。着なれないせいか、メルトンに對して妙に遠慮する傾がある。あとのものは皆和服で、かつ不斷着の儘だから、頓と正月らしくない。此の連中がフロックを眺めて、「やあ、やあ」と一つづついつた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ」といつた。フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして頻に屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突つついてゐる。所へ虚子が車で來た。是は黒い羽織に黒い紋附を着て、極めて舊式にきまつてゐる。あなたは黒紋附を持つてゐますか。やはり能

(高濱清。俳人。)

をやるから、其の必要があるんでせう。」と聞いたたら、虚子が、「え、さうです。」と答へた。さうして、「一つ謠ひませ

んか。」と言ひ出した。自分は謠つてもようござんす。」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。餘程以前に習つただけで、殆ど復習といふ事をやらないか

ら、所々甚だ曖昧である。其の上、我ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聞いてゐる若い連



夏目漱石

理の當然

中が、申し合せた様に、自分をまづいと言出した。中にもフロックは、あなたの聲はひよろくしてゐる。と言つた。此の連中は、元來謠の「う」の字も心得ないものどもである。だから虚子と自分の優劣はとても分らないだらうと思つてゐた。然し、批評をされて見ると、素人でも理の當然を所だから、己むを得ない。馬鹿をいへ。といふ勇氣も出なかつた。

すると虚子が近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、一つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。と所望してゐる。虚子は自分に、ぢや、あなた謠つて下さい。と依頼した。是は囃

の何物たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、又斬新といふ興味もあつた。謠ひませう。と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取寄せた。鼓が來ると、臺所から七輪を持つて來さして、かんくゝいふ炭火の上で、鼓の皮を焙り始めた。みんな驚いて見てゐる。自分も此の猛烈な焙り方には驚いた。大丈夫ですか。と尋ねたら、え、大丈夫です。と答へながら、指の先で張切つた皮の上をかんと弾いた。ちよつと好い音がした。もういゝでせう。と七輪から卸して、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をいぢくつてゐる所が、何となく品が好い。今度はみんな感心して

見てゐる。

虚子はやがて羽織を脱いだ。さうして鼓を抱へ込んだ。自分はすこし待つてくれ。」と頼んだ。第一、彼が何處いらで鼓を打つか、見當が附かないから、ちよつと打合せをしたい。虚子は、こゝで掛聲をいくつ掛けて、こゝで鼓をどり打つか、御遣りなさいと、懇に説明してくれた。自分にはとても呑込めない。けれども合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかゝる。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひ出した。「春霞たなびきにけり。」と半行程來るうちに、どりも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢

領承す

萎靡因循

力である。けれども途中から急に振ひ出しては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循の儘、少し押して行くと、虚子が矢庭に大きな掛聲をかけて、鼓をかんと一つ打つた。

自分は虚子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な、悠長なものとは、考へてゐた掛聲は、丸で眞劔勝負のその様に、自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、此の掛聲で二三度波を打つた。それが漸く静まりかけた時に、虚子が又腹一杯に横合から威嚇した。自分の聲は威嚇される度に、よろ／＼する。さうして小さくなる。暫くすると、聞

威嚇す

いてゐるものがくすく、笑ひ出した。自分も内心から馬鹿々々しくなつた。其の時フロックが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一所に吹出した。

それから散々な批評を受けた。中にもフロックのは最も皮肉であつた。虚子は微笑しながら、仕方なしに自分の鼓に、自分の謠を合せて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならぬ所があるといつて、車に乗つて歸つて行つた。

—漱石全集—

皮肉

二三 逆 櫓

(一)攝津國尼崎市
西南方の海。
(二)鎌倉景政の
裔。正治二年
歿。八六〇

逸物

判官は大物浦にて船揃して、軍の談議ありけるに、梶原平三景時、船に逆櫓と申す物を立て候うて、軍の自在を得る様にし候はゞや」と申しけり。判官、逆櫓といふは何ぞ」と問ひ給へば、梶原、逆櫓とは船の舳に艦へ向けて櫓を立て候。其の故は、陸地の軍は進退逸物の馬に乗りて、心に任せて懸るべき處をば懸け、引くべき折は引くも易き事にて侍り。船軍は押早めつる後、押戻すはゆゝしき大事にて侍るべし。敵強からば舳の方の櫓を以て押戻し、敵弱からば元の如く艦の櫓を以て押渡し侍らばや」と申したりければ、判官、軍

といふは、大將軍が後にて、蒐けよ、攻めよといふだにも、引退くは軍兵の習なり。況して豫て逃支度したらん、戦に勝ちなんや」と宣へば、梶原、大將軍の謀の良きと申すは、身を全くして敵を亡す。前後を顧ず、向ふ敵ばかりを打取らんとて、後を知らぬをば猪武者とて、危き事にて候。君は猶若氣にてかやうには仰せらるゝにこそ」と申す。判官少しく色損じて、知らずとよ。猪鹿は知らず、義經は只敵に打勝ちたるぞ心地よき。戦といふは、家を出てし日より、敵に組みて死なんとこそ存ずる事なれ。身を全くせん、命を死なじと思はんには、本より戦場に出でぬには若かず。敵に組んで

命を死なじ

死するは、武者の本なり。命を惜しみて逃ぐるは人ならず。さらば和殿が大將軍承りたらん時は、逃儲して、百挺千挺の逆櫓をも立て給へ。義經が船には忌々しければ、逆櫓といふ事、聞くとも聞かじ」と宣へば、あたり近き兵共之を聞きて、一度にどつと笑ふ。梶原よしなき事申し出してけりと赤面せり。判官は、抑、景時が義經を向ふさまに、猪鹿に喩ふる條こそ奇怪なれ。若黨共景時取つて引落せ」と宣へば、伊勢三郎義盛、片岡八郎、武藏坊辨慶等、判官の前に進み出でて、既に取つて引張るべき氣色なり。景時之を見て、戦談議に兵共が所存を述ぶるは常の習、よき義には同じ、悪しきを

ば棄て、如何にも身を全うして平家を亡すべき謀を
 申す景時に、耻を與へんと宣へば、却つて殿は鎌倉殿
 の御爲には不忠の人なり。但し年比は主は一人、今日
 又主の出でける不思議さよとて、矢さしくはせて、判
 官に向ふ。子景季、景茂續いて進む。判官腹を立て、刀を
 取つて向ふところを、^(一)三浦別當義澄、判官を抱き止め、
 畠山庄司次郎重忠、梶原を抱いて動かさず、^(二)土肥次郎
 實平は源太を抱き、多々良五郎能春は平次を抱く。各
 申しけるは、此の條互に穩便ならず、友諒其の詮無し。
 平家の洩聞かんもをこがまし。又鎌倉殿の聞し召さ
 んも其の憚あるべし。當座の興言苦みあるべからず。

^(一)頼朝の臣。正治二年(一八七四)歿。年七十四。
^(二)頼朝の臣。武藏の人。建久二年(一一八五)殺さる。年四十一。
^(三)頼朝の臣。相模の人。承久二年歿す。

意趣

と申しければ、判官實にもと思して鎮まれば、梶原も
 勝に乗るに及ばず。此の意趣を結びてぞ、判官終に梶
 原には愈、讒せられける。
 —源平盛衰記—

二四 俳句評釋

沼波瓊音

^(一)大原や蝶の出で舞ふ朧月

^(二)丈草

朧月夜に大原の景色を見ると、霞んだ朧月で、ぼろ
 つとして居る所へ、蝶が舞つて居る。蝶の色も何も能
 く見えな。唯朦朧たる中に、ちらく、蝶が舞つて居
 る姿が見えるといふ景色である。此の句を芭蕉が見
 て、「成程是は佳い句である」とほめたさうである。夜、蝶

^(一)山城國愛宕郡。京都市の東北。
^(二)内藤氏。尾張の俳人。元祿十六(一七〇九)年七月二十五日歿。年三十五。

神韻縹渺

が出て舞つて居るといふことが、神韻縹渺たる趣をなして居る。

(一) 信濃の俳人。通稱小林彌太郎。文政十年(一八二八)歿。年六十五。

やせ蛙負けるな一茶これにあり 一茶

一茶は悲惨な家庭で育つたので、弱い者に大變同情をもつて居る。此の句なども、單に滑稽のみでなく、裏面には溢るゝ如き同情が見えよう。蛙合戦が始つてゐる。瘦せこけた蛙が出て、非常に苦戦に陥つてゐる。そこで一茶が瘦蛙の肩を持つて、敗けるな、負けるな、俺が此處に居るといつて、頑張つて居る所である。ちよつとしたポンチ繪のやうな有様が目に浮ぶ。何だか、一茶までが瘦せた人であるらしく思はれる。

(二) Punch.

(一) 本名森川百仲。彦根の俳人。正徳五年(一七三三)歿。年六十。

卯の花に月毛の駒の夜あけかな 許六

極彩色の土佐繪か何かのやうな景色である。活動は餘りないが、綺麗な句である。此の句については面白い話がある。去來(二)がかういふ趣向を前から考へて、句にしようと思つて居つた。所が、有明の月にのりこむとして、後がどうも巧くつかない。月毛駒「葦毛駒」としたり、のの字を入れたり、色々苦心しても具合がわるい。終に其の句を棄てた。其の後に、許六が何の苦もなく此の句を作つたのを見て、自分は短才だと悟つたと自白して居る。

白團扇隣の羲之(三)に書かれけり 大江丸

(二) 向井氏。肥後元年の俳人。寶永四年(一七二七)歿。年五十。

(三) 支那晋の有名な書家。大伴政胤。大化二年(一八)歿。年八十八。

Passive.

白い團扇を家に置いたら、隣家に居た書の自慢な人が、誠に一人よがりな拙い字を書散して行つたといふ意である。「隣の羲之に」といふので、嘲つた意味も、又羲之氣取の書天狗も現れてゐ、^(一)パッシーヴの「書かれけり」は、頼みもしないのといふ迷惑さが籠つてゐる。

聲かれて猿の齒白し峯の月

^(二)其角

凄味を詠んだのである。此の句は、^(三)巴峽秋深、五夜哀猿叫、月など、能く詩にある趣から作つたのであらう。猿の齒を取立て、白いといつた所に、其角の強みが現れて居る。俳諧古選の評には、「雄渾。惜哉、不令此老從」

^(二)榎本氏。江戸の俳人。寶永四年(二三六七年)歿。年四十七。
^(三)謝觀の清賦の句。

事於詩」と言つてある。

木枯の果はありけり海の音

^(一)言水

木枯が長く、吹續いて居る。非常な音をして吹いて居る。其のうちに、暮方にでもなつたのであらうか、それがぱつたり止んで、世間が静かになつた。すると、向ふの方で、どうつといふ音がする。海の音だ。浪がまだ騒いで居るんだ。さういふ所を詠んだのである。此の句は、當時大層評判な句で、其の爲に、「木枯の言水」といふ異名を附けられたといふことである。

旅に病んで夢は枯野を駈廻る 芭蕉

芭蕉病中の吟。最後の句である。芭蕉は元祿七年十

^(一)池西氏。南部の俳人。享保四年(二三三九年)歿。年七十二。

推敲

月の十二日に歿したが、此の句の出來たのは八日である。旅行中病氣になつて、それが大變重くなり、心も確かでない、夢幻の境に彷徨うて居る。其の時、夢心に枯野を駈廻る様に感ずるといふのである。重い病氣をやつた者は、心持がむしやくしやして物が分らなくなつて、非常に煩悶するやうな場合に、こんな感じを経験して居るであらう。此の句、初には「枯野を廻る夢心」としたが、色々側に居る人と相談したり、自分にも考へたりして、かう直したのである。死病の重患に苦しんで居ながらも、此の最後の句を、かくも推敲して居つたとは、如何に此の詩人が斯道に忠實であつ

たかを示して十分ではないか。

俳諧講演集

二五 冬枯の大井川

千葉 江東

東海道(一)島田の驛はこゝに盡きた。此の川一つ向ふへ渡れば、其處が直ぐ(二)金谷の町だ。といふ。今、大井川の冬枯の堤に立つ。

はしやぐ

飽くまではしやぎきつた冬の空は、底も知れぬ程凝つて蒼く、見るも寒げに、高くく澄んで居る。白い雲が、時々ぼつちり浮んでは、又一たまりも無く吹流される。風の風いだ大海に、白い帆影が現れては、又迂つて行くとも思はれる。日は小春日の様に暖いが、風

(一)駿河國志太東岸。大井川の
(二)遠江國榛原郡。大井川の西岸。

は飽くまで冷たく骨を刺す。岸の水楊の葉は半ば枯れて、ほろ／＼と零れる。肩を窄めて、俯いて泣いてゐるのではあるまいか。名も知らぬ小鳥が、矢の様にひよい／＼と飛んで出ては、劈く様な細い聲でヒヒヒと啼く。冬が來た。宿が無くなつた。と鳴くのかも知れぬ。名にし負ふ天龍、富士に押並んで、東海道隨一の大河と呼ばれた大井川も、今は瀬は涸れ、水は落ちて、廣さ何町といふ石ばかりの河原が、眼前に展開されて居る。見渡す河上も、河下も皆磧である。石といつても幾百年と無く激流に洗はれて、握飯の様に圓くなつて、灰茶色に晒されて居る。其の灰茶色の石原の中

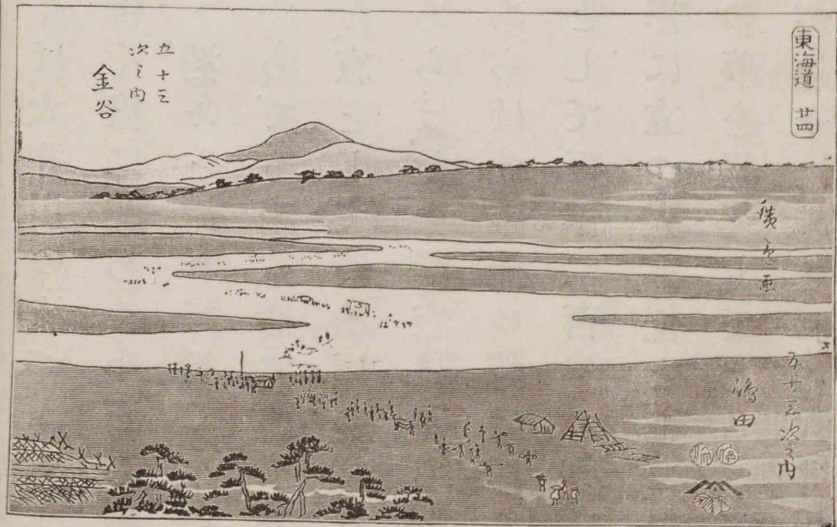
名にし負ふ
隨一

展開

瀬枕立つ

を、幾箇にも割つて白く動くは、大井川の流であらう。白い流水は、日光を浴びて青く緑に閃めく小石を噛み、大石を噛んで、瀬枕立て、滔々と流れて行く。小鳥の時たまに啼く聲が、他界からでも來る様に響く外には、河の兩岸の此の眞晝を、寂として鍛冶屋の鈍音一つ響かない。若し夢に容あらば、此の靜寂は即ち夢の容であらう。若し夢に聲あらば、此の流の聲は即ち夢の聲であらう。水は滔々として百年二百年の夢を見て、夢の様に流れて居る。岸に立つ人亦恍として、何時しか二百年三百年の昔の夢を繰返してゐる。
「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」

何處となく長閑な馬の鈴
がちやらんちやらんと鳴
つて、空にも入れよ、地にも
徹れよと、清^すしい馬子唄の
聲が夢に入る。吁、富士とい
はず、天龍といはず、一葉の
船、一本の棹で越されぬ河
流は何處にあらうか。獨り
大井川は、船で越すことを
許されなかつた。徳川幕府
が江戸に移つて關東を經



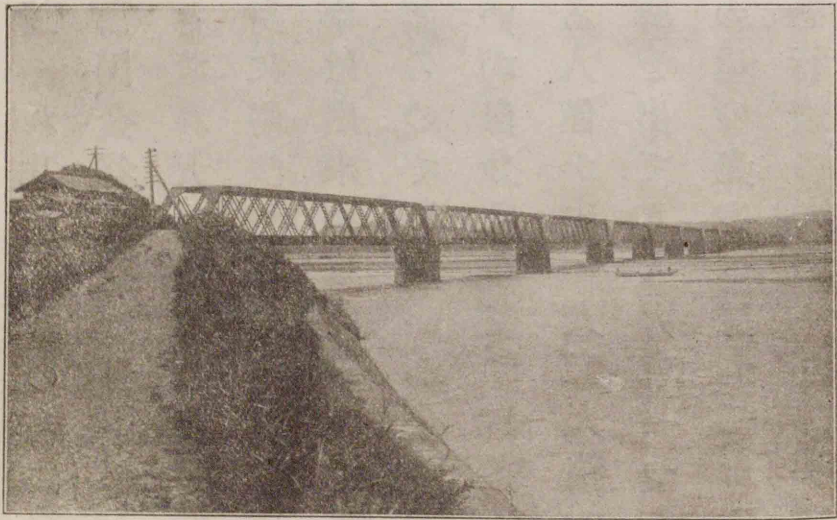
昔の大井川(廣重筆)

東海道 廿四

立
次
内
金谷

裸一貫

營すると共に、大井川を東
海一の要害と見た。若し船
で上流に溯り、下流に下つ
て、此の河の形勢を見極め
る者があれば、天下の守は
悉くこれから破れる。乃ち
令して川越を行はせたと、
土地の歴史に精しい人は
説く。
かくて裸一貫の荒くれ
者は、東海道唯一の名物と



今の大井川

零落

なつた。さしも鬼を取挫ぐ荒くれ武士も、其の背に負はれては、ぐうの音も出ず、島田、金谷の全盛目を驚かしたのも、今は昔だ。寝てこそ渡れ大井川。其の大井川の岸に、今初冬の日光を満身に浴びて立てば、盡きせぬ流の聲も無意味に聞く事は出来ぬ。石に碎けて咽ぶのは、昔の全盛を聞け。と語るのでは無いか。今の零落に泣いて居るのでは無いか。自分は昨夜、日が暮れて島田の驛に降りた。降りる人僅かに一人二人。狭いプラットホームを潜つて驛を出ても、人力車一つあるでは無い。風は寒い。満天の星の光さへ冴えて、ぶると震へて居る。舊式の懸行燈の火影をたよりに、

鞆を抱へて一夜の宿を探した自分は、今更に島田の宿の衰頹を泣かざるを得なかつた。——舊幕府の名残——

二六 幕末論 其の一

福地源一郎

前將軍家は勢に迫られて、伏見、鳥羽の戦を開くに及びたれども、戦亂は素より其の志にあらざりしかば、恭順謹慎の念は、已に大阪城を出でたる時よりして定まりたるものか。但し伏見、鳥羽の戦に、幕兵が散散に撃破られて退きたること、實に天運の然らしめし所なりとはいへ、抑、出兵の策宜しきを得ざりしに由るものと言はざるべからず。

(一)第十五代徳川慶喜。
(二)共に山城國紀伊郡。明治元年幕軍此に官軍と戦ふ。

恭順

臍を固む
依違

^(一)山城國乙訓
郡。

懸軍

推辭

此の時に當り、京都に在りける薩長の兵は慄悍なりと雖も、僅かに數千に過ぎず。討幕の密勅は薩長の臍を固めしめたりと雖も、他の諸藩は依違の間に在り。幕府依然として大阪に據りて自重し、海には其の軍艦を攝海に繋ぎて、西南よりする通路を塞ぎ、陸には兵庫の關門を鎖し、淀川の水路を阨し、^(一)山崎其の他の要所に護兵を配付して、以て諸方の連絡を斷たば、京都は宛然敵圍の中に在るが如き形勢となり、薩長の懸軍は死地に陥り、戦はずして自ら潰ゆべかりしなり。是を幕府の爲の上策とす。然れども勅使頻に降りて、前將軍家の上京を促され、之を推辭する能はざ

^(一)若代國會津
藩。
^(二)伊勢國桑名
藩。

君側を清む

鼓譟す

りしとならば、前將軍家は斷然汽船に投じて東歸せられ、大阪城の留守を會桑^(一)に託して、前策を行はしめらるべかりしなり。是を中策とす。此の兩策とも行ふべからずして、必ず京都に攻上りて、以て一戦に薩長の兵を破り、君側を清むべかりしならば、全軍の力を集めて、一舉直ちに山崎街道に向ひ、鼓譟して京都を突くの策ありしのみ。是を下策とす。彼の狹隘なる路に向つて兵を分配し、側面の攻撃を意とせず、加ふるに數隻の軍艦を有し、海軍に於ては全國中幕府に敵すべき諸藩無き好地位に在りながら、かゝる無策の軍畧を行ひたること、苟も兵を談ずる者は、必ず幕府

の爲に奇怪の思をなす所なりとす。當時幕府の將校中、豈此の觀易き兵理を知る者なからんや。

然り而して其の言の行はれずして、彼の無策の出兵に歸したるは何ぞや。他なし、幕府が恃むべからざるを恃みたるが故のみ。幕府の當路者思へらく、薩長の兵數千、敢へて恐るゝに足らず。前將軍家の大旆一たび京都に向はゞ、他の諸藩は靡然として幕府に隨從し、薩長の孤軍は戰はずして潰散すべし。在京の諸藩亦皆戈を倒にし、銃を後にして、背後より薩長の兵を攻撃し、以て幕府に應ずべし。砲聲一たび伏見、鳥羽に聞えんか、洛中處々に火の手上りて、敵は前後挾撃

大旆
靡然

戈を倒にす

洛中

公言して憚
らず

を受くるに至らん。兵畧の如何は敢へて問ふを要せず。と。現に幕府諸老は、出兵の方畧を論じたる將校に向つて、徃々之を公言して憚らざりき。蓋し京都内應の事は、之を幕府に内議して密約せる輩ありしを以て、幕府は輕々之を信じたるなり。若し幕府にして、彼の上策を採つて徐に大阪城に自重せば、維新の功業はしかく容易に其の績を見難かりしならんか。

二七 幕末論 其の二

さて、前將軍家東歸の後、幕府文武の議論は概ね皆主戰の一方に傾き、或は箱根、碓氷の險に據つて官軍

主戰
(一)伊豆、相模、駿河三國の界。
(二)上野、信濃兩國の界。

逆覩し難し
蒼生塗炭に
苦しむ
Napoleon
III.
（西曆一八七
〇—一八七
三）
東西に志あり

を防ぐべしといひ、或は濃尾の間に兵を進めて戦ふべしといひ、或は再び東海東山の両道より大舉して京都に攻上り、海軍と相應じて大阪城を恢復すべしといふものありて、軍議紛々たりき。然るに、前將軍家が固く恭順の議を執りて動き給はざりしが故に、幕議は遂に謝罪降伏とは決したるなり。此の時に際し、若し幕軍防戦と決したらんには、勝敗の決逆覩し難く、随つて其の戦亂は延いて數年に亘り、全國の蒼生必ず塗炭に苦しみしならん。

しかのみならず、當時最も恐るべかりしは、外國の干涉なりき。佛帝那破崙第三世漸く東西に志ありし

（二）徳川照武。慶應三年巴里博覽會に派遣せられたり。



徳川 照武 喜

が、之を交趾に試み、之を墨西哥に試みて、其の意の如くならざりし折からといひ、加ふるに、當時前將軍家の弟民部大輔佛國に在りて大いに帝の優待を得たりしかば、幕府の士大夫中には、竊に佛國の應援に依頼し、其の兵力を假りて以て薩長其の

他を平定するの議を首唱して、幾分の勢力を占めんとするに至れる者もありしをや。若し此の議にして行はれたらんには、日本帝國の金甌は、爲に永く一闕

金甌

を生じて、不測の禍源たるべかりしなり。

終を全くす

剋立

然るに前將軍家は斷乎としてかゝる邪議を却け、ひたすらに恭順を表して動き給はざりき。其の一身の生命を犠牲にし、又徳川氏の存在を犠牲にして、専ら國家の幸福と國民の安寧とを望まれたるは、決して尋常の思想に非ざること知るべきなり。然らば則ち前將軍家は、徳川氏滅亡の際に臨みて、能く其の終を全くせしめたる明將軍なりといふべきに非ずや。嗚呼、源頼朝が始めて幕府を剋立せしより七百年、其の間、武門にして政權を掌握して天下を治めたるもの、曰く源氏、曰く北條氏、曰く足利氏、曰く織田氏、曰

社稷を犠牲にす

く豊臣氏、曰く徳川氏。而して其の滅亡の時に於ても、國家の爲に、國民の爲に、其の社稷を犠牲にしたるものは、ひとり徳川氏あるのみ。如何ぞ特筆せざる可けんや。

—幕府衰亡論—

二八 中央公園

厨川 白村

何でも調子外れに馬鹿々々しく大きな事の好きを米國で、中でも最も大きな都會は、五百萬の人間が一塊になつて、大きな事ばかり考へてゐる紐育である。私は豫てから十分覺悟をして行つたから、紐育で何を見ても決して驚いては遣らなかつたが、爰に一

心得顔

つ私をして驚く所か、頗る閉口させた上、之でもかといつて、とう／＼私を降参させて了つたものがある。去年の二月の初、紐育へ着いてから三日目か四日目の午前であつた。一つ博物館を見に行かうと思つて、まだ土地の勝手も全く分らないのに、大吹雪の中を、一人で宿を飛出した。博物館は公園の東通第五街にある。ところが私が、ひとかど心得顔に乗つた電車は、其の方へは行かずに途中から曲つて、公園の西通へ出た。しかたが無いから、博物館の見當に當る八十丁目あたりで私は下りた。なに公園のことだから、此の邊を真直に通り返けて東の方へ三四丁も歩けば、



紐育中央公園

博物館に到着疑なしと獨合點したのが抑、の誤。大雪の降りしきるなかに、人通はおろか、犬ころ一匹あるな所を、痛い足を引きずつて、行くけども、博物館らしいものは見當らぬ。やがて小山のやうな所へ上つて見ると、そこには馬鹿々々しく大きな池がある、何でも紐育全市に水を供給する貯水池はこれであるらしい。寒さと疲労で弱り果てた私は、今更あとへ引返す事もならず、さりとて肝腎の博物館はどこにあるのや

途徹もない
兜を脱ぐ

ら影も形も見えない。尋ねようにも人はゐない。まるで西比利亞の大荒原の真中で行暮れた様な心細さであつた。痛む足をじつとさすつて、漫々たる池の水を、獨りぼんやり眺めた時ばかりは、此の途徹もない大きな公園に對して、心から私は兜を脱いだ。仕方がないから、又十丁餘りも足を引きずつて、やつこのと博物館へ辿り着いた時は、もう氣息奄々として病める野良犬の如く、とても陳列品などを見る勇氣も何も無かつた。是は私が如何なる場合にでも、地圖や數字に不注意である天罰だといつて、友人が笑つた。此の大公園は、其の名の示す如く、市の中央目抜の

極致

Hudson
Riverside

地にあつて、假に之を私有地だとすれば、確かに土一升金一升の地面。ちやうど東京の日本橋あたりか、大阪の船場の様な位置にある。それを惜氣もなく南北二哩半、東西約一哩をくぎつて公園とし、巨萬の財を之に投じて園藝術の極致を盡し、ちやうど上野公園と日比谷公園を合した様な設備をしたものである。その餘りに廣大な爲に、紐育土着の人ですら、屢、此の中で道に迷ふといふのは有名な話である。紐育の市中には、ハドソン河畔のリバーサイドか、さもなれば、餘程場末でもなければ、私人が獨占の庭園と目すべきものは尺寸だもない。そこで大小無數の公園は、

〔Oasis.〕

倫敦人が所謂市の「肺臓」ともなり、黄塵萬丈の地にオアシスともなつて、五百萬の市民に貴賤貧富の別ちなき共同の恩恵を與へるのである。私は、土一升金一升の町の真中に、こんなだゞつ廣い大きい公園があらうとは、夢にも思はぬばかりか、閉口し降参させられたのであつた。

英段
英米國の地積の單位。H. 1 カ1 (Acre) 一英段は我が四段十八歩餘。
〔Kensington Garden.〕

英京倫敦へ行つた人は、誰でもハイド・パークの大きいのに呆れる。併し其の面積は三百六十一英段で、之と隣したケンシントン・ガーデンを合しても六百三十一英段、即ち七十七萬八千五百坪、ちやうど東京日比谷公園の約十八倍である。ところが紐育の中央

度膽を抜く

獨占主義

〔Andrew Carnegie.〕
米國の大富豪。西曆一八八三—一九一八

公園に至つては、八百七十九英段の地を占めて、英京の此の二大公園を合したよりも更に遙かに大きい。慥かに日本人の度膽を抜くに足るだけに大きい。金錢があつて獨占主義なく、人と共に楽しまうとする心があれば、公共設備の發達するのは當然の事だ。米國の社會で富豪が尊敬せられるのは、必ずしも黄金崇拜の爲のみではない。彼等が金を儲けると共に、それを使ふ道を知つて居るからである。慈善事業、平和運動、教育學術の進歩に貢獻し、文學藝術の保護者であるが爲だ。子孫の爲に美田を購はないといつて、幾千萬弗の金錢を公共事業に捧げる多くのアン

ドルー・カーネギーがあるからである。

印象記

故國

二九 北京の四時

宇野哲人

故國ならば、鶯の歌に夢を覺し、心樂しく床を離れる此の頃であるが、北京では黄鳥などは思もよらない、唯騒々しい鶉の聲、雀の囀を聞くばかりである。春眠不覺曉。處々聞啼鳥。といふやうな長閑な趣は、江南一帶の風光で、北京には殆ど見ることが出来ないものである。

(一)唐の孟浩然の詩。

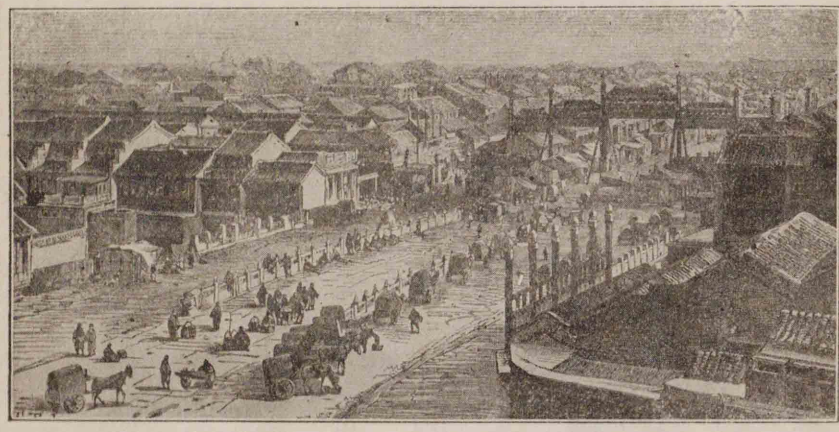
陰翳

併し乾燥した北清の空の、常に一點の陰翳すら無い程澄渡つて居るに、朝日影の纔かに差出る頃、忽然

仙樂

滿目荒涼

沙塵濛々



北 京 市 街

として仙樂を天に聞くのは妙である。支那人に聞くと、是は鳩の足に結び付けてある鳴鑿といふもので、鳩が飛ぶに随ひ、風を受けて鳴るのであるといふ。花も咲かず、鳥も歌はず、滿目荒涼たる此の地で、かやうな仙樂を聞くのは、實に愉快とせねばならぬ。午後になると毎日風が起る。沙塵濛々、最も甚だしい時

黃塵萬丈

は満天俄に搔曇つて、室内暗黒となり、晝も燈火がほしい程である。謂はゆる黄塵萬丈とは、決して例の支那流の誇大の言では無い。

蕭條

晩春から首夏にかけての新緑は、始めて蕭條たる北京の天地をして、活氣あるものと化せしめる。城壁の上に杖を曳くと、四望全く緑の天地となつて、西山一帯も青んで見える。併し冬の間氷に封じ込められた一切の不潔物は、俄に蒸發を始めて一齊に悪臭を放ち、且大陸の常として炎暑が酷烈を爲に、愉快を殺ぐこと一通りでない。其の爲に大なる邸宅では、天棚といつて、屋根程の高さに葭簾張の日覆を作つて、暑

杖を曳く

を避けて居る。

騷人墨客

澄渡つた北支の秋は、實に胸襟の爽快を覺えしめる。乍ち陰、乍ち晴、變り易い秋の空も、北支では絶えず快晴である。騷人、墨客も中秋に雲を恨む必要は無い。氣候も寒からず、暑からず、時には馬に騎つて郊外の遠乗を試みるのも會心の至である。春夏の際に北京に來た人は、北京を悪口すること一通りでないが、涼秋八月北京に遊ばうものなら、誰でも北京に心酔せぬ人はあるまい。

心酔

冬の寒いのは何處も同じことであるが、北京の春に風が多くて冬に風が少いのは、何よりも嬉しい。氣

温は零下十五六度に下るけれども、家屋の構造が防寒に適して居るので驚くには足らぬ。殊に北京城を繞つて居る護城河中に氷滑を試みるのは、愉快此の上もない。唯降雪が少くて、謂はゆる北京八景の一なる西山霽雪の美觀を見る機會の多くないのを恨むのみである。

—支那文明記—

三〇 造化のたくみ

土井 晚 翠

たふ

あゝうるはしきあめ地の
たくみをいかにしたゝへまし。
月日めぐりて年行きて

いくそ

かはるいくその景色ぞや。

いろふ

春の歩みの着くところ、
地に花かをり草いろひ、
はるのいぶきの行く所、
そらに蝶まひ鳥うたふ。

清きは夏のゆふ河原、
涼しき眺見よやとて、
空に月照り風そよぎ、
地に露結び水ながる。

しぐれも雲も時めきて、
秋のゆふべの色よはた、

谿は紅葉のあやしき、
峰は友よぶ鹿のこゑ。

冬はあしたのあけの色、

色なき空に色ありて、

雪のこずゑに梅薫り、

梅の梢に雪かゝる。

あゝいつくしきあめつちの

たくみをいかにたゝへまし。

同じひと日の空合も、

遷るいくその眺ぞや。

— 晚翠詩集 —

(一) 持統、文武天皇頃の歌人。
(二) 聖武天皇頃の歌人。
(三) 延暦四年(四四五)の歌人。
(四) 元慶元年(五三七)の歌人。
(五) 平安朝の初の歌人。
(六) 天慶九年(一六〇六)の歌人。

三一 國語と國文

國語は開闢以來の國語なり。素戔嗚尊も、神武天皇も、聖德太子も皆國語にて歌作りし給ひき。柿本人麿^(一)、山部赤人、大伴家持等の作れる歌も、在原業平、小野小町、紀貫之、源實朝等の作れる歌も皆等しく國語なり。^(二)源氏物語も、徒然草も、太平記も、八犬傳も、謠も、淨瑠璃も、話し家の話す落語も、講談師の語る講談も、皆等しく國語なり。三千年來國語にて話されたるもの、積りて我が國文學を成せり。

國語には變遷あり。上代の國語は今日の人に理解し易からず、古人再び今の世に生るとも、今日の國語

會得す

は會得し難かるべし。用語に變化あり、文法にも多少の相違あればなり。されど根本の構造に於ては相違なく、日本語はあくまでも日本語なり。衣食住の習慣、風俗、世とともに變化すれども、日本人はいつまでも日本人なるが如し。

促音

拗音

梵語

やまと詞

上代の國語はやはらかにして母音に富めり。促音なく、拗音なく、語の首に濁音なく、又ラ行の音なし。漢學、佛法日本に傳はり、漢語又は梵語より入來れる單語多くなりて、音韻より見ても多少の變化あり、詞のいひあらはし方にも種々の變化を生ぜり。昔の儘の日本語をやまと詞、みやび詞などともいへり。奈良時

代、平安時代の和歌はおほむねやまと詞にて詠まれしなり。

鎌倉時代より足利時代にかけて、漢文の語も句調も交りて、和漢混合文となり、徳川時代に至りては、漢學流行の結果、漢文に學ぶこと愈々多くなれり。今の世の文語文は即ち和漢混合文なり。

平安時代までは、言と文との間にさまでの相違は無かりき。漢語の入交れる和漢混合文の發達せる時代、一般の國語は文學上の語と離れ行はれて今日に至り、口語と文語との間に著しき懸隔を生じたり。明治の御代に至りて、口語其の儘を綴りて文をなす事

懸隔

大いに盛になりしは、最も喜ぶき事なり。

我等國語を學ぶは日常の便利の爲なるは勿論なれども、國語の上に殘されたる我等祖先の思想をも知ることを得べし。されば現代の口語文、文語文を自由にし書き自在に綴るは勿論、進んでは古代の國語にも遡りて、之を理解するまでに習熟せんこそ望ましけれ。古代の國語にも習熟するは、これ我等が祖先の思想を知り、我が國家の歴史を知る所以なればなり。世界の各國皆其の國語を重んぜざるは無し。國語は國民團結の一要素なればなり。我等の漢文を學び、英語を學ぶは、廣く知識を世界に求むるの趣旨に外

要素

ならず。かちく、山、桃太郎のお伽噺より、いろは短歌、百人一首、年とともに進める讀書力には、八犬傳も、淨瑠璃も、柿本人麿の歌も、源氏物語も、皆讀みて理解し得べし。國語に習熟し行くは、日一日と日本國民たる資格の添はり行くものといふべし。

三二 言葉の變遷

佐々 醒雪

日本語は幸にして二千年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。而も萬世一系の皇室を戴いた同一民族の間にのみ發達したので、今から約千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢

世紀

物語を見て、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出来てゐる。こんな國はいふまでもなく、世界に又とはない。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は頗る變化したものが多し。

例へば、甚だしく變遷したのは、「いへ」といふ言葉である。昔は「いへ」といふと、家族とか、家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。然るに今日「いへ」といふと、家屋即ち建築物のこととて、「いへぬし」は借家の持主の義に

用ひられてゐる。

かゝる變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻に用ひられ始めてからも、同様の變化は認められる。例へば「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物は御座いませんか」と呼んで来る。然るに中古では、「不用なる者」といふと、用ふるに堪へぬ鈍物か、痴呆者のこととて、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた」と記してあつて、「不用」といふのは、悪戯者又は無法者の義である。鎌倉時代に「不用なもの」は御座いませんか」と呼歩いたら、悪

戯者はないかな」と呼歩く鼠取薬と間違へられたであらう。

矛盾

此等は未だ單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪なる矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬罐といふ名は残つてゐたり、「白馬」と書いて「あをりま」と讀んだり、赤くなくても、鹿末な本を赤本といつたり、黄色な表紙の草雙紙を青本ともいつたり、不思議な言葉を列擧すれば、際限もないが、就中不思議なのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬころ、支那から

抹茶

渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつた。然るに日本で硬い上等の物が澤山出來るやうになると、飯を食ふにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひ始めた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出來た。今日では、珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのは飯碗、珈琲を飲むのは珈琲碗といひさうなものだが、さう理窟通に行かぬ。

「さかな」とは本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽」「酒杯」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするもののごとで、古は野菜類は勿論皆「な」で

贅澤

あるし、昆布や若布などの様な食べられる海藻は、皆磯菜といつた。それから魚類は、なのなかの上等のものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは、上等の家でなくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も、贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。既に魚類を「さかな」といふことに定まつてしまふと、下戸が食つても、やはりそれを「酒な」といふのは

飯を食つてもやはり茶碗といふのと、同じ不思議である。

言葉は又使つて居る中に段々下落するものである。例へば大工といふ語は、工藝家中の俊秀なもの尊稱で、多くの小工どもの頭領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはる者は、小屋掛の叩大工でも、やはり大工である。かの親方なども同様で、今日では一人の手下をも持たない男でも、印袷纏さへ着て居れば、即ち親方であり、頭領である。

最後に一つ故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎のモ

歌舞伎

サ詞、六方詞、これなどが故意に作つた人爲的の言葉である。一時兵隊言葉といつて、一本橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともある。つたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他には迷信から來た變造語が少々ある。例へば、海邊に生えてゐる「蘆」といふ草を「惡し」と聞えるといつて、わざと「葎」と呼びかへたり、「四」の音を忌んで「よ」といつたり、「梨」を「ありの實」「硯箱」を「あたり箱」「鰯」を「あたりめ」といふ類が多少は行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮様の御所では、髪のない僧侶のことを、わざと「髮長」など、いつた例もある。

かやうに同一の語が、例へば「髮長」といつて「髪」のなことを顯すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、言葉の變化は窮極を知ることができなものである。

— 醒雪遺稿 —

三三 岩倉右府 其の一 井上毅

(一) 岩倉具視。明治十六年歿。年五十九。
 (二) 石見國津和野藩士。明治四年歿。年八十。
 (三) 吉野朝の忠臣。正平九年歿。二〇一四。

維新の初に、「神武の古に復る」といへる大義を定められしは、故右府公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に其の人なかりしによれり。源親房卿は學識ありて、時の帝の御覺もめでたかりしかど、其の人の所見は

(一)醍醐天皇の年
號。
(二)村上天皇の年
號。

有職

達觀す

(一)延喜、天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ公家、武家の間に隙を生ぜしなれ。といへり。

故右府公は搢紳有職の家に生立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐる爲に、神武の古に復る。といへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人ありとは申すべき。此の一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節をば、すべて破竹の勢を以て破りたり。世の人は明治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなりと思ふらめど、心

百揆
盤根錯節
破竹の勢

(一)聖武天皇の年
號。

譴を蒙る

(二)京郡上賀茂の
東北。
蟄居

ある人は、溯りて天平以來の宿弊の更に破り難きを破られたることを知るならん。

德川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて、



岩倉具視

久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に召によりて夜中參内し給ひけり。此のをり公は一つの大囊を

携へて宮門を入り給ひしが、囊中の文書は、みな公の蟄居中に計畫せられて、主松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。此の時大勢尙定

(三)京都の勤王
家。野々口隆
正の門人。明隆
治五年。没。年
六十三。

禁闈
請謁

まらずして、物論紛々たりしに、公は俄に躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も爲に容を改め、朝議大いに決するに至る。而して大令一度發して、外は將軍を廢し、内は攝闈、議奏、傳奏を廢し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべからざる基礎を建てられたるは、實に公の輔翼の力なり。就中、復古の第三日に、禁闈に達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝ事をいたく禁止せられたるは、これぞ積年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺されしなる。とて、公の晩年に親しく物語し給ひき。此の一事は扇の要なりとは知る人ぞ知らん。

長袖の人

(一)明治六年朝鮮の無禮を彈懲せんとして、蕭牆の内に變亂を見る

あはや

剛膽は政治家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を備へおはしけり。(一)征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んとする時、陸軍將校の中にて勇武の聞えある一人は公の邸に參り、客室にて謁見し、一應二應議論の末、其の人怒れる眼血を濺ぎ、毛髮倒に豎ち、脇差を左の手にて鞘もたわむばかりに握りつめ、貴殿もし意見を枉げ給はずば、御身の爲に悪しかりなん。と言放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけたり。此の時公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりしに、公はすこしも

自若として

動ずる色なく、自若として其の座を守り給ひき。とぞ
内の人の物語りし。

公の畏きあたりの御覺殊にめでたかりしは、世の
人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我をおきて
人はあらじと、思ひたまへる隠さはぬ明き心の深か
りしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上
の事は筆に載するも畏ければ洩しぬ。

三四 岩倉右府 其の二

公は夙に開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體
の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて、宮内

國是

(一)大君の御門の守り我をおきてまた人はあらじ云々(萬葉集、大伴家持)
(二)君の御代御代隠さはぬ明き心をすめらべに極め盡して云々(萬葉集、大伴家持)
君臣水魚雲の上

台鼎の高き位

公達

省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺制の尊
きことを世に知らせん爲のはからひとぞ聞えし。公
は勤儉の二字を大政の本として、輔弼に心を盡させ
給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、台鼎の
高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時をな忘
れそ。とて、常に公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を
作り、後の世まで守り文にせよ。とて、子孫に遺し給ひ
しが、其の附録一篇は、専ら奢侈と遊惰とを戒め給ひ、
重き病の床にまし／＼つゝ、親しく旨を授けて、さむ
らふ人に筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が
案文に調印せしは七月十五日にして、薨去の前五日

なりけり。今はの際の遺言にも、己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ」とありきとぞん。

あらざらん
後の世の心
盡し

公は日に夜に、公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせ給はざりき。朝五時前には目を覺し、侍やある」と聲かけさせ給ひ、今日は何某をば何時に召せ。次に何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ、何某に夕何時に參れと記して申し遣はせ。など仰せられき。多くの公達は父君の代筆として、文かく事に忙しかりきとぞん。公の病に侵され給ひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年の頃より何となくあらざらん後の世の心盡しの節々

を、知る人に語らひ給ひし事ぞ多かりける。同年の冬、或人の許へ贈り給へる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草

誰が下りたちてかづきあぐらん

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國の爲に行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

公の平生の仰に、大臣たるものは、其の身の進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準を示さめ」とのたま

節操を二つ
にす
晩節を全く
す

家子

ひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げんことを思ひ立ち給ひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽入れず、是非に。とて歎き請ひ給ひしかば、上には忝くも誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し給ひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾を押退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ家子等をめし集へられ、今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ盃まゐれ。とて酒を賜ひけり。人々歡の色をなしたりけるが、さて其の翌日に事重らせ給ひぬるぞかひ無き。今はの際まで、夢幻の間にも公の事のみ心に懸けさせ給ひ、無からん後の事までも、人も

て雲の上に聞え上げまゐらせしこともありきとなん。
—— 梧陰存稿 ——

水 奥朝日海日田道向守

自修文

一 桃山の陵

大町 桂 月

明治天皇の御陵を拜せんとて桃山に向ふ。御陵の道は知らざれども、參拜者の絶間なければ、人の行く後につきて歩み行けば路はまがはず。左右に物賣る店の連るを見る。店盡きて路は爪先上りとなる。畑あり、雜木林あり、竹林あり。急なる坂路盡くるかと思へば、はや陵前の廣場なり。嬉しや、手洗水、竹の筒より迸り出でたり。順ぐりに待ちあはせて手を清めつゝ見れば、竹筒の上に一錢の銅貨あり。寺や社と同じやうに心得たるものありしにや。

衛兵の立てる門を入れば、右に葱華輦を見る。これ御柩を桃山驛より御陵まで運びたるものなり。鳥居の前に行きて頓首す。正面に拜殿あり。其の上、岡勢隆起して、其の頂に御須屋の半ば以上を仰ぐ。御須屋と拜殿との間には、御

葱華輦 屋根の上にな
ぎの花に似た
金の珠のある
御乗用 天子の
御須屋 御大喪の際、
御柩を載せた
御殿を安置する

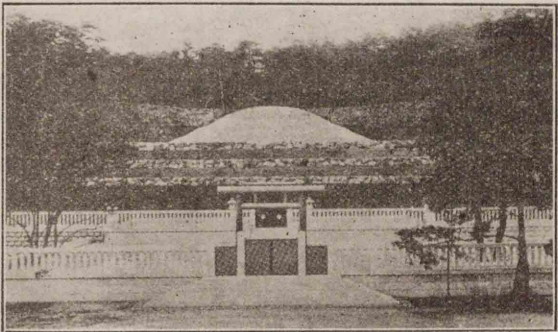
一 桃山の陵

一

(一) 伏見町の南
方町東西北四十
三町回四里十二
(二) 山城國綴喜郡
高津川南岸の
幡宮がある八
(三) 山城國乙訓郡
大山崎村の西

(四) 桓武天皇が延
暦十三年都を
移すに於てか
ら明治元年
まで千七十四
年
曠世
世にまれなこ
いと曠は空し
い意

東夷
東の方の野蠻
人



桃山御陵

柩を運び上ぐる爲に設けられたる線路猶存す。左右は樹なほ若けれども、自然のまゝの山林なり。その中に松樹多し。願れば巨椋池(一)一帶の眺望開けたり。男山低くして鬱蒼たり。その右に稍高きは天王山なり。この外淡く見ゆる攝津、大和の山々、一々其の名を知らず。歸路は御陵の本道を緩やかに下りぬ。

桃山は伏見とはいへど、京都を距ること僅々一二里に過ぎず。廣義に見れば、桃山は京都に在るなり。明治天皇が桓武天皇以來一千年間皇居のありたる京都を後にして、東京に遷り給ひたるは、曠世の御英斷なり。天下の識者皆其の御英斷を感歎せざるは無し。されど當時聖帝に別れまつりし京都方面の人々の悲や如何なりけん。今日圖らずも御亡骸を迎へまつりて、悲歎にくるゝ中にも、また自ら一種の感慨を催さるを得ざるべし。

稜威
天子の尊い威
光のみいづ
宵衣旰食
夜のあけな
着かへて終日
はたらいて夜
おそく食事を
すること
肝膽を砕く
智慧のありた
けをしぼつて
考へる
如何ばかり
ぞや
どれ程であつ
たらうか。非
常なものであ
つたらうとの
意
(一) 大風起兮雲
飛揚。威加三海
内。守得三猛士
鄉安得三猛士
守四方。大風
を賊に。大風
を自分にと。か
へた。どうか
猛士を得て四
方を守りたい
との意
(二) 徳川家康の
臣。慶長五年
家康東征の留
守中戦死し

し。京都に生ひたゞせ給ひしこと十七年、御輦はるゝ箱根の嶮を越え、もとは所謂東夷の住みし東京に遷り給ひしより四十五年、日本の日本が進んで東洋の日本となり、更に進んで世界の日本となれるは、これ全く稜威の致す所、内治に外交に、宵衣旰食、肝膽を砕き給ひしこと如何ばかりぞや。大風起つて雲飛揚す。威、海内に加つて故郷に歸る。漢の高祖は詠じけん。明治天皇にありては、威世界に加つて歸り給ひしは、現し御身にはあらで、御亡骸なり。感慨に堪へざるは故郷の父老のみならんや。時恰も晩秋、悲風御陵の樹に咽び、愁雲京畿の野に漠々たり。

嗚呼、明治の世は明治天皇の崩御と共に終りぬ。而して京畿の地に一大靈境を現出しぬ。今の御陵のある處は、もとの伏見城の本丸の址なりと聞く。當年伏見城を築きしは秀吉に非ずや。我が國史の上にて、人臣として最も偉大なるものは秀吉なり。伏見城を枕に討死したる鳥居元忠も亦武士の雄たるを失はず。桃山にはなほ桓武天皇の御陵もあり。桓武天皇は神武天皇と明治天皇との間に、最も偉大なる天皇なり。明治天皇の偉大は更に桓武天皇に

過ぐ。桃山何の地ぞ。京畿間の一要害なれども、叢爾たる一丘陵のみ。唯聖帝と
偉人との蹟を留めて萬古に雄なり。
——サマリの水——

二 南京の壺

柴(一) 田 鳩 翁

(一)名は享。京都の徳に關する道俗の訓話を創話とて心學の道天保十年(二四九九)歿。年七十五。名主を管する。名主とは支配内各町の雜務を掌る者。略。町役人の略。名主五人組等をいふ。支那の酒のこを竹葉といひ、日本でも酒の異稱を笹といふのでかといつたのである。下戸。酒をすかない人。支那から渡つて來た染めつけて焼いた古一一般物の壺に珍重される。

さる御町内に婚禮ぶるまひがござりました。お年寄(二)を始め町役、家持の人人一同に座に就きますると様々の馳走がある時に、かの年寄は酒と聞いては笹の露にも酔ふ程の下戸(三)ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なり。ともお取りくだされい。と、(四)南京の古染附の壺に大りんの金米糖を入れて、年寄の前に持つて來る。座中も、これは好いお心附、ひらにお菓子(五)を召しあがられい。とすゝめる。年寄もわるうはなし、然らば頂戴を致しませう。と壺を引きあげ、手首を突込むときに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々(六)にこじまはして見ても、ひつばつて見ても抜け

大りん おほつぽ。金米糖。葡萄牙語。ひらに。どうぞ。眞顔。まじめな顔。無理無體に。むりやりに。悪七兵衛平景清と美保谷國俊。源平屋島浦の戦に清家の景清は源氏方の國引いて、遂に之を引切つたこと。銚とは、頭筋を徹ぶ爲しにかぶとのうち垂れて居るも接骨。骨つぎを業として居る者。徳川時代(二)に五戸を一組とし、これに或特別の責任を負はせたもの。宋の大儒、政治家。名は光。西曆一〇八六—九一〇八六。

ず、まごくして居らるゝと、側から見つけて、どうなされましたぞ。いや、手が少しつまりまして、思ふやうに抜けませぬ。と、眞顔(七)になつていはるゝ。それは氣の毒、私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。と、一人が向ふへ廻つて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清(一)と美保谷(二)が銚(三)をやるやうなど、座中が一同にごつと笑へど、年寄はなか／＼笑はず、泣顔になつて、どうも痛んで抜けませぬ。といふさあ、これから大騒になり、醫者(四)ごのを呼んで來い。接骨ではいくまいか。と酒宴(五)の興も醒めはてました。
時に五人組(二)が一人進み出で、いづれもお騒ぎなされな。我等承つた事がある。昔司馬温公といふ人、幼き時大勢の小兒と共に大きな壺のほとりに遊んでゐましたが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の小兒はこれを見て逃歸つたが、司馬温公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投付けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました。と或人の話ぢや。今お年寄の御難澁(六)は、この話によつて似てゐる。いざ

しかつべら
しくもつともらし

器量のよい
のをつかみ
容貌のよい
を自慢にする
かむ以下のつ
てある
せん方なさ
に云々
しかたなきに
かんしやくを
おさへたり。

や、我等が司馬温公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。しかつべらしく煙管を提げ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて、雪を降したやうになると、やれお年寄、お助かりなされたか。その手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何とをかしい話ではござりませぬか。つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら、首がちぎれても離すまいと、片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、金錢の事のやうなれど、つかむ物はこればかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいと、かづき歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事もならず、慎も出来ず、せん方なさに癩氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりさては氣の毒なものでござります。壺割つてしまつてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬ

さき、御用心が第一でござります。

——鳩翁道話——

三文鳥

夏目漱石

(一)鈴木三重吉。
小説家。文學
士。伽藍のやう
な。お寺のやう
な。こゝでは、
だつびろく
大きなこと。
夢に文鳥を
云々
文鳥の事を思
ひながら腹た
心持。
大儀
たいそうであ
ること。おく
明るみ
明るいとこ

(一) 三重吉は鳥籠を丁寧ていねいに箱の中に入れて、縁側へ持出して、此所に置きますから、といつて歸つた。自分は伽藍がらんのやうな書齋しよさいの真中に床を展ひらべて、冷やかに寝た。夢に文鳥を背負せお込んだ心持は、少し寒かつたが、眠つて見れば、不斷の夜の如く穩かである。翌朝眼が覺めると、硝子戸に日が射してゐる。忽ち文鳥に餌をやらなければならなかつたと思つた。けれども起きるのが大儀たいぎであつた。今に遣らう、今に遣らうと考へてゐるうちに、どう／＼八時過になつた。仕方がないから顔を洗ふ序をもつて、冷たい縁を素足すあしで踏みながら、箱の蓋を取つて、鳥籠を明るみへ出した。文鳥は眼をばちつかせてゐる。もつと早く起きたかつたらうと思つたら、氣の毒になつた。文鳥の眼は眞黒である。臉おもとの周圍に細い淡紅色の絹絲を縫附けたやうな

筋が入つてゐる。眼をばちつかせる度に、絹絲が寄つて一本になると思ふと、又丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながら、此の黒い眼を移して、始めて自分の顔を見た。さうして、「ちよ」と鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据ゑた。文鳥はばつとさまり木を離れた。さうして又さまり木に乗つた。さまり木は二本ある。黒味がかつた青軸を、程よき距離に橋を渡して横に並べた。其の一本を軽く踏まへた足を見ると、如何にも華奢きよしゃに出来てゐる。細長い淡紅たんこうの端に、眞珠を削つたやうな爪が着いて、手頃なとまり木をうまく抱へ込んでゐる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既にさまり木の上で方向を換へてゐた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持直して、心持ち前へ伸したかと思つたら、白い羽が又ちらりと動いた。文鳥の足は向ふのとまり木の眞中あたりに、具合よく落ちた。「ちよ」と鳴く。さうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗ひに風呂場へ行つた。歸りに臺所へ廻つて戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう

華奢
よわくし
く、しなやか
であること。

一つには水を一杯入れて、又書齋の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕丁寧ていねいに餌を遣る時の心得を説明して行つた。其の説によると、無暗に籠の戸を明けると、文鳥が逃出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手を其の下へあてがつて、外から出口を塞ぐやうにしなければ危険だ。餌壺を出す時も同じ心得で遣らなければならぬ。と、其の手つきまでして見せたが、かう両方の手を使つて、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかつた。

自分は已むを得ず餌壺を持つたまゝ、手の甲で籠の戸をそろりと上へ押上げた。同時に左の手で開いた口を塞いだ。鳥はちよつと振返つた。さうして「ちよ」と鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の處置に窮した。人の隙を窺つて逃げるやうな鳥とも見えないので、何となく氣の毒になつた。三重吉は悪い事を教へた。

大きな手をそろ／＼籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏はばたきを始めた。細く削つた竹の目から、暖いむく毛が白く飛ぶ程に翼を鳴らした。自分は急に

自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺をとまり木の間に漸く置くや否や、手を引込ました。籠の戸はばたりと自然に落ちた。文鳥はとまり木の上に戻つた。白い首を半ば横に向けて、籠の外にゐる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして、足の下にある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

其の頃は日課として小説を書いて居る時分であつた。飯と飯の間は、大抵机に向つて筆を握つて居た。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍のやうな書齋へは、誰もはいつて來ない習慣であつた。筆の音が淋しさといふ意味を感じた朝も、晝も、晩もあつた。然し時々此の筆の音がびたりと止む、又止めねばならぬ折も大分あつた。其の時は指の股に筆を挟んだ儘、手の平へ顎を載せて、硝子越しに吹荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが濟むと、載せた顎を一應撮んで見る。それでも筆と紙が一絡にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥が忽ち「千代、千代」と二聲鳴いた。

筆を握いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いた儘、とまり木の上からのめりさうに白い胸を高く突出して、高く「千代」といつた。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだらうと思ふ程な、美しい聲で「千代」といつた。三重吉は、今に馴れる。「千代」と鳴きますよ。きつと鳴きますよ」と受合つて歸つて行つた。

自分は又籠の傍へしやがんだ。文鳥は膨んだ首を二三度堅横に向け直した。やがて一團白い體が、ぼい」ととまり木の上を抜け出した。と思ふと、綺麗な足の爪が半分餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つくり返りさうな餌壺は、釣鐘のやうに静かである。さすが文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のやうな氣がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。さうして二三度左右に振つた。綺麗にならして入れてあつた粟が、ばら／＼と籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた咽喉の所で微かな音がする。又嘴を粟の真中に落す。又微かな音がする。其の音が面白い。静かに聽いて居ると、丸くて細やかで、しかも非常に速である。董程な小さい人が、黄金の椀で瑪瑙の基石をつげさまに敲いて居るやう

な氣がする。

嘴の色を見ると、紫を薄く混ぜた紅のやうである。其の紅が次第に流れて、粟をつく口先の邊は白い。象牙を半透明にした白さである。此の嘴が粟の中へはいる時は非常に早い。左右に振蕩く粟の珠も非常に軽さうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに、尖つた嘴を黄色い粒の中に刺込んで、膨らんだ首を惜氣もなく左右に振る。籠の底に飛散る粟の数は、幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一吋五分程だと思ふ。自分はそつと書齋へ歸つて、淋しくペンを紙の上に行らしてゐた。縁側では文鳥が「ち」と鳴く。折々は「千代、千代」とも鳴く。外では木枯が吹いてゐた。

—漱石全集—

(1) Wilhelm Tell.
(2) 傳説學者。文學博士。東京帝國大學講師。

西曆一千三百七年、瑞西の民はをかしくもまた苦しい經驗を嘗めさせられた。

四 (一) ウィルヘルム・テル

(二) 松村武雄

(1) Hapsburg.
瑞西の舊貴族の祖となる。

(2) Albert.
代官。アルベルト帝の代りとなつて其の事務を取りあつたもの。

(3) Gestier.
敬意を拂ふ尊敬の意をさげすむ。

觸
つげしらせ。告示。

我意に募る。自分の意志をどこまでも通さうとする。横紙破り。無理を通す。是が非でも押しとほす。傲然。おごりたかぶつたさま。屈竟な。骨ぐみなどのしつかりした。

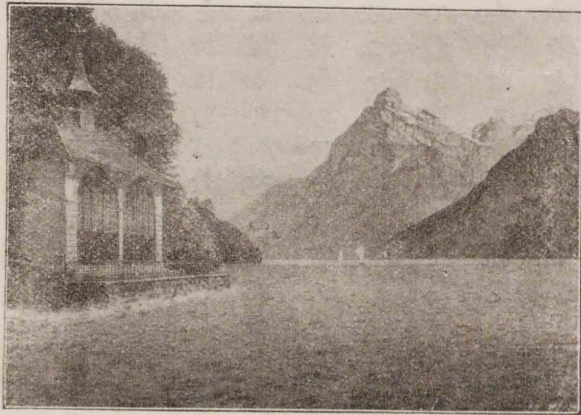
(一) ハプスブルグのアルベルト帝の代官に、ゲスレルといふものがあつた。上の威光を笠に着て、さまざまの事を企て、は、罪もない民を苦しめた。

或時ゲスレルは、人の往來の多い場所を見計らつて、小高い丘に一本の柱を建て、其の上に帽子を載せた。そして厳しく領内の民に命じていふやう、「何人にもあれ此の路を通るものは、恭しく膝を屈けて頭を垂れて、帽子に敬意を拂はねばならぬ。柱にかゝる帽子こそ、忝くも代官の姿と思へ。萬一にも命に背くものがあれば、命を斷ち家を没するぞ」といふ。

領内の民は、代官のお觸を聞いて、心の中ではをかしくも、ばかりしくも思つた。けれども虎の威を借る狐のやうなゲスレルは、我意に募り、横紙破りで名の高い代官である。人々は濫々と帽子の前に頭を下げて通る。代官の仰を受けて帽子の番をしてゐる役人共は、驚のやうな眼付をして、路を過ぐる人々を監視してゐる。そして帽子に禮をするものを、傲然と高い所から見下しながら、顔には嘲の色を浮べてゐる。

やがて山住みの男が通り掛つた。屈竟な體を真直に伸して、大跨にゆるゆる

ひたと
びつたりと。
何處を風が
吹く
自分に何等の
關係もない場
合にいふ。
すはといは
ば云々
さあといへば
すぐ飛びか
らうとする
勢。「ちんす
は」「ちんす
る」をつめて、
勢をつよめた
一瞥をくれ
る
ちよつと見る
上意止め
お上の御命令
であるぞと
まれ。
横柄
たかぶつて居
ること。尊大
ぶること。



祠 の ル ナ

ると歩いて来る。彼の眼はひたと柱の上の帽子に向つてゐる。けれども彼の心には帽子も役人もないのか、何處を風が吹くといはんばかりの顔付である。役人共は憎い奴と睨み付けながら、其の男の近づくのを待つてゐる。すはといはば飛懸らんす氣勢である。それを知つてか知らないでか、男はじろりと役人共の顔に一瞥をくれたまゝ、帽子には頭を下げないで、のこ／＼と通り過ぎようとする。怵へかねて役人共は一齊に呼び止める。
「上意止め。」
横柄な調子である。男は立止つた。そして、はつきりした聲でいふ。

「何、上意と申されるか。一體何で私をお止めなさる。」
「お上の掟を存せぬか。早く此方に來て帽子に叩頭をしろ。」

悪びれる
おくする。
一轍に
いちづに。い
つこくに。
蔑にす
あなどりばか
にする。

「何で帽子に叩頭をするので御座るか。」
「黙れ。此の帽子は忝くも代官様の御體と同様ぢや。」
役人共の嚴しい顔付も、横柄な音調も、此の男の胸には何の恐れも起さぬと見えて、飽くまで落着き拂つてゐた。

「私はどうしても帽子に頭を下げるのは厭で御座る。」
役人共はさながら自分の身を嘲られたやうに怒つた。
「此奴横着な。恐多くも代官様を輕んずる。さあ早く叩頭をしろ。」

けれども男はどうしても頭を下げやうともせぬ。怵へかねて役人共は彼に繩を掛けた。そして代官の前に引出した。此の男は誰であらうか。即ちウイヘルム・テル其人である。

テルは代官の前に引出されても、悪びれた氣色もない。代官は眼を怒らし、テールを睨んだ。一轍に我意を募らしても、蟲のやうにおとなしく頭を下げてゐた民の中にかやうな骨の硬い男を見出したのは意外である。けれどもたゞ意外とばかりでは濟まぬは、代官の腹の裡である。己が威光を蔑にした

むら／＼と
にはかに。急
心頭にのほ
る心におこる。
奸智
わるぢま。

男、己が命令を反古にした無禮者と思ふと、堪へきれぬ怒氣がむら／＼と心頭にのぼる。代官は高い所からテルを憎さげに見下しながら、ごんな罰を加へようかと考へた。

奸智に長けた代官は、正面からテルを罰することを避けて、後に廻つてじりじりと苦しめようと思つた。やがて好い思案が浮んだのか、急に顔色を和げていふ、

「これやテルとやらいふ男、其の方弓の名人といふことぢやが、誰にも後れは取るまいな。」

深い巧のあるとも知らぬテルは、きつばりと答へた。

「仰せの通りで御座ります。」

「よしそれぢや、此の方所望がある。」

敵を思ふ壺に陥れた快さに微笑みながら、代官はいふ、

「其の方の子供の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せ。所望ぢや、さあ用意をせい。見事林檎が射落せたら、今日の無禮は赦して遣はす。」

若し少しでも誤つたら、其の方の首はないものと思ふがいふ、

テルは心の中にしまつたと叫んだ。百歩を隔て、柳の葉を射る腕に覺えはある。けれども代官が射よと望むのは、我が子の頭の林檎である。柳の葉を穿つには胸が騒がぬ、いとしい子供の頭を掠めて矢を放つに、無心であられるか。萬が一にも思ふ矢壺をちよつと下に外したら、我が子の命はないものと極つてゐる。テルの胸は千々に亂れて、暫くは何の返答もせぬ。

代官は氣をいらして、上座から、「どうぢや」といふ。今は免れぬところ、テルはきつと代官の顔を睨んで、承知致したと答へた。

と、やがてテルの子が呼出された。嚴かな一座の氣勢の何となく唯ならぬに、幼き心のさすがに動いて見えた。テルは暫く我が子の顔を見守つてゐた。が、やがて思ひ入つた口調で、

「どうぢや、殿の仰には、其の方の頭に林檎を載せて、數十間の此方からそれを射て落せとの仰ぢや、其の方は林檎を載せて矢面に立つ氣か。」

といふ。子供ははつと驚いた。頭から冷たい水を浴びせられたやうな心地で

一座の氣勢
其の座のやう
思ひ入つた
口調
深く決心した
言葉つき
矢面に立つ
矢の飛んで來
る正面に立
つ。

健氣 かひくし
くさいましい
こと。心がけ
のよいこと。

流るゝ すつと並んで
居る。

固唾を呑む そばで結果を
心配して見て
居る場合に
ふ。固唾とは
一心になつて
事をする時
中にたまる
口ば。

親の子とて
豪膽なテルの
子だけに。

發止と
矢の當つたさ
まにいふ。

ある。けれども彼は健氣にも氣を取直して、

「お父様の爲とあれば、矢面に立ちませう。」

といふ。一座の者は覺えず涙ぐんで、代官の顔を見る。代官は眉毛すら動かすことなく、傲然と構へてゐる。

子供は頭に林檎を載せて庭に立つた。數十歩を此方に離れて、テルが二本の矢を持つてきつと身を構へる。代官の左右に流るゝ人々は、固唾を呑んで控へてゐる。テルは弓に矢を番へながら大きな聲で、

「眼を塞いでゐろ。矢が恐くて頭を動かしたら一大事ぢや。」

といふ。親の子とて子供もさすがに膽が太い。彼は平然として、

「恐くはない。」

といひながら、涼しい眼を睜つて、父の様子を伺つてゐる。テルは満月の如く弓を引絞つて切つて放す。途端に彼は覺えず眼を閉ぢた。我が放つ矢の行方を氣遣つたからである。矢は流るゝ星のやうに空を斬つて、發止と林檎を貫く。林檎は小さい音を立てゝ大地に落ちた。

昂然 心に自信があ
つておごりた
かぶるさま。

卑見

私の意見。卑
は謙遜の語。
模擬性

模擬性

感染性

うづめるたち。
かぶれるた
ち。

君子

學問道德のす
ぐれた人。

一座の者は思はず手を叩いてテルを讃へた。代官は案に相違の面貌に、苦い笑を浮べてゐる。と、ふと一本の矢がテルの手に残つてゐるのに氣が付いて、

「手に残る矢は何の爲ぢや。」

と尋ねた。するとテルは昂然と空に嘯きながら、

「何の爲でも御座りませぬ。林檎を仕損じた折殿の胸を射抜く覺悟で……」

といひ捨て、呆氣に取られる代官を後に、悠々と立去つた。

— 歐洲の傳説 —

五 史傳を讀むべし

大 町 桂 月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申述候。人は何人も模擬性を有し居候。又感染性を有し居候。而して一生の中此の二性の最も熾なるは、少年時代若しくは青年時代に候。ごちらかと申せば、模擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に

五 史傳を讀むべし

小人 器が小さくて道徳心のない者。
 小才子 ちよつと見かけは才としかけて、實際才子でない者。
 聖人 小利口な者。
 智徳共に最もすぐれて、萬人の手本となる人。
 眼界が狭くなる。見聞がせまくなる。
 國家百年の大患 國家にとつて永久の心配。通じたる個人的。めい、自分と自分といふやうな。重厚。おもく、しく、て、ねんごろなこと。
 (一) 積善之家、必ず餘慶あり。積不善之家、必ず餘殃あり。易經の善い事をすれ

感染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割出さざるべからずと存候。
 此の頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接すること極めて少く、随つて自然人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、請ふ、大いに史傳を讀まれよと。
 又一つ今の青年に通じたる缺點之あり候。そは個人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考が餘りに強く候。随つて重厚雄大の氣風無くして、こせく、ちよこく、する小人物が多く候。これも史傳と親しまぬより起ることに候。史傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。といふことがよく解り申すべく、行が自ら重厚になり申すべく、人物もごつしりとして參り申すべく候。

ば子孫にまであり、悪い事をすれば子孫にまで悪い報いがあるとの意。殃はわざはひ。
 發展 さかんになること。
 人格 人たる品格。歸納す。一つ一つの事例を集めて、それから一般的原理を見出すこと。
 公明正大 あきららかに、隠しださず、たゞしく、大きいこと。
 精神の香 精神上の事に關してのよい言のあるのをいふ。
 淨化す 清らかに化する。
 動もすれば、どうかする。
 (一) 大町桂月著。富山房發行。

申すまでも之無く候へども、國家の盛衰興亡は、全く人物の如何に之あり候。盛なる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるもの候へば、史傳と共に常に座右に置き、日々絶えず讀誦せられよ。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致候へども、近時の文學は動もすれば人を誤るもの多し、其の選擇には深き注意を要すべく候。
 (一) 新學生訓

六 豊太閤の文事

三 上 參 次

從來豊太閤の人物、事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記、繪本太閤記等の書にして、三國志、漢楚軍談などと共に、普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られ

武邊の偉人 武の方面に於ける偉人。いみじき非常なき。甚だしい。文盲 文を知らないこと。あきめ仔細に。まかに。光彩 ひかり。つや。一面にては。雄才大略 すぐれた智慧と大きなはかりごと。規模 しむく。かゝる。舊大名云々 明治以前に大名であつて、今華族になつて居る者。祐筆 そばに居て物を書くことを掌つた役者。又その役の者。高臺院。北政所と稱す。淺野彌兵衛の養女。

たり。然るに惜しいかな、此等の書には、武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、間、又いみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤が無學文盲の人と傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。

磨けば益、光り、鑽れば彌、堅し、眞に偉大なる人物は、仔細に研究するに隨ひて、一層其の光彩を放つものなり。予は今太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり、故に舊大名たりし華族の諸家、古社寺、舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾千なるを知らず、公の祐筆たりし文章家の手に成りたりと思しき、雄健にして生氣に富める文書其の大部分を占めたりとはいへ、確かに太閤の自筆なる色紙、短冊、消息の類も亦少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは、親子、夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託すべくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。

生氣に富む 活氣にみちて居る。消息 手紙。託すべくもあらず。まかすべきものではない。清婉 しきよくつくしいこと。秀調 すぐれていきいきして居ること。峻拔 たかくぬけて居ること。無下に。あまり。ひどく。甚だ。徳川初世の儒醫。加藤清正に仕ふ。敏捷 はやいこと。咄嗟 急の間。秀吉が小田原の北條氏を攻めた時の事。天真爛漫 心のまゝにあらはして少し

書狀に用ひたる文字は大抵平假名なり。書體及び筆力に清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにて、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字も亦用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決して能くし得る所に非ざるなり。江村專齋の老人雜話に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、ごみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。

軍陣にての消息などは、咄嗟に文章を成したるにて、字句の鍛鍊なしといへども、天真爛漫、辭簡にして意達し、少しも凝滯する所なし、而してその間に溢るゝばかりの愛情あらはれ、趣味の津々たるものあるを覺ゆ。天正十八年小田原在陣の中に、母なる大政所へ上りし書中に、「そもじさま御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候て、可給候。たのみ申候。」の語あり、千言萬語を費すとも、子の親に對する愛情は、此の若く御なり候て、の一語より適切なる

もかざりけの
無いさま。
辭簡にして
ことばは簡單
であつて、意
味は十分に通
じて居る。
凝滞
つかへて通じ
ないこと。と
どまつて進ま
ないこと。
津々
わき出たあふ
れるさま。
そまじ
そなたといふ
に同じ。
遊山
の遊山。
きをも
氣をも。
可給候
たまはるべく
候。
適切
よくあてはま
ること。最も
切實であるこ
と。
けんさん
見參。あふこ
と。
ひまあけ
小田原城を攻
落してひまに
なつて。

はあらし。又その夫人淺野氏への書中には、ねんごろに文給はり、御げんざん
の心して、ねんごろにみたり。ことし内にはひまあけ可參候。心やすく候べ
く候。かならずとし内に參候て御目にかゝり、つもる御物がたり可申候。等の
句あるなり。祐筆の手に成りたる文書の中にも、かしここゝに太閤の口授に
かゝれりと思はるゝ所あり。固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人の
習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。然り、撥亂反正の功を
奏するには、多少かゝる氣風の必要もありしなるべし。しかも古文書の上よ
り觀察する時は、太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も
慈悲の念に富みたる、善良なる紳士なりしを見る。
さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤禁中に伺候しけ
るに、九重の櫻花今を盛と咲亂れけるを賞でて、其の下に徘徊せり。後陽成帝
遙かに之をみそなはしてにや、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製
を添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、即ち
忍びつゝ霞と共にながめしもあらはれけりな花の木のもと

(一)天正十六年。
(二)京都の北の方
の山。
(三)城山國葛野郡
花園村に在
り、臨濟宗の
古刹。
殺伐粗暴
あらうである
こと。
撥亂反正
世の中のみだ
れをさめて
あらためて
なほかへて
見ん深雪山
うづもる花
もあらはれ
にけり
とのへり元
正しいさまに
かへすこと。
禁中
宮中。
九重
禁中の別稱。
みそなはし
てにや
御覽になつた
のであらう
か。
感佩
深く心にかた
じけなく感ず
ること。

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して龍安寺に憩へる事
ありき。頃しも春の最中なりけるに、庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却つて淡雪の
ちらりと降り來りしかば、太閤おもしろく思ひて、
時ならぬさくらの枝にふる雪は花をおそしとさそひ來ぬらん
と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉野の花見を催されし
時、關屋の花の下にては、
吉野山たれとむるとはなれども今宵も花のかげにやざらん
と詠じ、藏王堂にては、
歸らじとおもふ家路を入相のかねこそ花の恨なりけれ
と歌はれたり。巧を弄ばずしてなかく、に雅趣に富み、格調も亦平凡ならず
して、古の撰集の中にも置きたき心地せらる。



豐太閤筆蹟
(醍醐寺藏)

(一)共に紀伊國海草郡。
 (二)駿河國庵原郡。
 (三)秀吉の邸宅。天正十三年京師に營み、東都大宮から西へ千本に至る。町から北は太北條に至る。後陽成天皇の行幸があつた。
 (四)ほこを横たへて詩を賦す。魏支那三國(曹操)の武帝(曹操)が建安十二年冬吳國征伐の際に舟を浮べ、梁を横たへながら短歌行の詩を詠んだこと。
 感興 おもしろみ。たれとむる。云々 誰かとまれとめるのではなかが。雅趣 みやびやかなおもむき。

此の他、紀州征伐の時には和歌浦、玉津島にて、小田原陣のをりには清見瀉にて、征韓の役には肥前の名護屋などにての詠歌も少からず。天正十六年の聚樂第への行幸の時は勿論、醍醐の花に、大佛の月に、その折々の歌多く、時としては大宮人の昔を忍ばしめ、又時としては古英雄の横槩賦詩の面影を想はしむ。而して功成り名遂げたる此の千古の偉人も、亦無常を感じたる事ありてにや、

露とちり雫ときゆる世の中に何どのこれる心なるらんと嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去に際し、あはれにも、

露とおき露と消えにし我が身かななにはのことは夢のまた夢

といふ辭世の短冊をさめられき。げに太閤は伊達政宗、細川忠興等と同じく、其の頃の武人にして文藻ありしうちの録々たる者なりしなり。

確かに太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるものみにも、二三十はあるならん。しかのみならず太閤は時には學者をして往事を談せしめて之を聴き、又禪學の書の講義をも聴きたり

格調 字句のくみあはせや調子。撰集 誦むかし天子の詔で作つた歌集。何とのこれる云々 心のとまるのは何故であらうか。文藻 文章のあや。錚々 特にすぐれた人物。禪學 禪宗の學問。

き我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。

三訂帝國讀本卷四終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。本)

劍剪刃函減涼準况決冒免免佞仍兩	通用正
劍劔剪刀函減涼準况決冒免免佞仍兩	通用正
冤墻塚塲噴噐唇叙収廐厨卿鄉即効	通用正
冤牆冢塲噴噐唇叙収廐厨卿鄉即効	通用正
拔拿戲幟憩慨恒往稟屏并帽尅寶寇	通用正
拔拏戲幟憩慨恆往廩屏并帽剋寶寇	通用正
濱溫水殲欸概桿晉昂既整攢攢攢插	通用正
濱溫冰殲欸概杆晉昂既整攢攢攢插	通用正
盃鼓癡畧留畫瑣玄貓猪猿熔陰潛濶	通用正
杯鼓癡略畧畧瑣玄貓猪猿鎔陰潛濶	通用正
績績紀穀粘籤篡節笄竊秘願穎稟研	通用正
績績紀穀黏籤篡節笄竊秘願穎稟研	通用正
厠勅冲劬俟京亡並万	通用正
厠敕冲傲埃京亾並萬	通用正
婚姉妍妊野坂嚙叶厮	通用正
婚姉妍妊埜阪齧叶厮	通用正
考慙富忘庵嶋峯峩岳	通用正
攷慚富忘菴島峰峨嶽	通用正
概稿楫棕基案柿村普	通用正
槩槁楫櫟基案柿邨普	通用正
砧睹狸貉無烟汗毘朴	通用正
礎覩狸貉无煙汚毗樸	通用正
緋総網紆糾粽筍競稿	通用正
緋總網紆糾稷笋競稟	通用正

附錄

同字表 (いづれにて)

